

| | |
|--|----|
| 日本生態学会各賞候補者募集 | 1 |
| 第73回日本生態学会京都大会（ESJ73）開催報告 | 5 |
| 記事 | |
| Ⅰ. 一般社団法人日本生態学会 2026年度定時総会、 代議員会、各種委員会において報告・承認・決議された事項 | 8 |
| A. 報告事項 | 8 |
| B. 審議事項 | 15 |
| Ⅱ. 第73回日本生態学会大会の記録 | 20 |
| Ⅲ. 代表理事（兼会長）と業務執行理事の選任について | 24 |
| Ⅳ. 寄附一覧 | 25 |
| Ⅴ. 書評依頼図書 | 25 |
| Ⅵ. 寄贈図書 | 25 |
| 書評 | 25 |
| 日本生態学会役員・代議員・委員一覧 | 27 |
| 京都大学生態学研究センターニュース | 31 |

日本生態学会各賞候補者募集

第25回「日本生態学会賞」

顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たした本法人会員に対して授与される日本生態学会の最も権威ある賞です。受賞者は会員から推薦された候補者の中から選考され、大会時において表彰されます。

第31回「日本生態学会宮地賞」

生態学の優れた業績を挙げた本法人の若手会員を対象とした賞です。会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として3名の受賞者を選考し、各々10万円の賞金が贈呈されます。

第20回「日本生態学会大島賞」

野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本法人の会員を対象とした賞です。会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として2名の受賞者を選考し、各々10万円の賞金が贈呈されます。

第15回「日本生態学会奨励賞（鈴木賞）」

本法人の会員であり、学位取得後4年くらいまで（大学院生を含む）の今後の優れた研究展開が期待できる研究者に授与される賞です。自薦による応募者の中から原則として3名の受賞者を選考し、各々5万円の賞金が贈呈されます。

第4回「日本生態学会自然史研究振興賞」

生物の記載、分布、生活史など、地域の生物多様性情報の収集と公開を通して、生態学の基盤強化に寄与している個人または団体を対象とした賞です。自薦による本法人の応募者または本法人会員により推薦された個人または団体の中から原則として2件の受賞者・団体を選考し、各々10万円の賞金が贈呈されます。

記

1. 書式：生態学会ウェブサイト (<https://esj.ne.jp/esj/>) よりダウンロード
2. 送付先：
(電子メール) office@esj.ne.jp
(郵送) 〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8
日本生態学会事務局気付
日本生態学会〇〇賞選考委員会委員長
(〇〇は応募する賞名を入れて下さい)
4. 締め切り日：2026年8月17日（月）必着

日本生態学会賞規則

- 第1条 日本生態学会賞は、本法人会員で、顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たし、本法人会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、受賞は毎年原則として1名とする。
- 第2条 日本生態学会賞候補者を選考するため、日本生態学会賞候補者選考委員会（以下「委員会」）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は代議員の推薦により9名を選出するが、生態学の各分野に偏りの無いように配慮する。委員長は委員の互選により毎年定める。委員の任期は3年とし、毎年3名を改選する。ただし任期満了後2年間は再任されない。
- 第4条 推薦者は、推薦理由を添えて候補者を推薦するとともに、委員会の求めに応じて必要な資料を提出しなければならない。
- 第5条 委員会は推薦理由をもとに受賞候補者を絞り、推薦者が提出する資料にもとづいて若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、原著論文業績の他に啓蒙的役割を果たした著書類及びそれらの国内外の波及効果に留意する。
- 第6条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第7条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第8条 受賞者の決定は、受賞式が行われる3ヶ月前までに行う。
- 第9条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状及び記念品を贈呈する。
- 第10条 受賞者は、原則として、その授賞式が行われる大会において記念講演し、その内容を本法人の学会誌に総説として投稿する。
- 第11条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会宮地賞規則

- 第1条 日本生態学会宮地賞（以下「宮地賞」という）は、生態学の優れた業績を挙げた本法人の若手会員で、自薦による応募者もしくは本法人会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として3名とする。
- 第2条 宮地賞受賞候補者を選考するため、宮地賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。
- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、本法人会の英文誌または和文誌への本人の掲載論文の有無、及び会員歴（日本生態学会の英文誌または和文誌への本人の掲載論文の有無及び会員歴を含む）にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。

- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第7条 受賞者の決定は授賞式が行われる3か月前までに行う。
- 第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金10万円を贈呈する。
- 第9条 受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本法人の学会誌に投稿する。
- 第10条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会大島賞規則

- 第1条 日本生態学会大島賞（以下「大島賞」という）は、野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本法人の会員を対象とし、自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として2名とする。
- 第2条 大島賞受賞候補者を選考するため、大島賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。
- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては研究の継続期間や本法人の会員歴（日本生態学会の会員歴を含む）にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者となり選考の最終段階まで候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第7条 受賞者の決定は授賞式が行われる3か月前までに行う。
- 第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金10万円を贈呈する。
- 第9条 受賞者は受賞の対象となった研究課題について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説・解説等を本法人の学会誌に投稿する。
- 第10条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会奨励賞（鈴木賞）規則

- 第1条 日本生態学会奨励賞（以下「奨励賞」という）は、本法人の会員であり、学位取得後4年くらいまで（大学院生を含む）の今後の優れた研究展開が期待できる研究者で、自薦による応募者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として3名とする。
- 第2条 奨励賞受賞候補者を選考するため、奨励賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。

- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、会員歴にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者あるいは推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第7条 受賞者の決定は授賞式が行われる3か月前までに行う。
- 第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金5万円を贈呈する。
- 第9条 受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本法人の学会誌に投稿する。
- 第10条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会自然史研究振興賞規則

- 第1条 日本生態学会自然史研究振興賞は、生物の記載、分布、生活史など、地域の生物多様性情報の収集と公開を通して、生態学の基盤強化に寄与している個人または団体を対象とし、自薦による本法人会員の応募者、または本法人会員により推薦された個人または団体の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた個人または団体に授ける。なお、授賞は毎年原則として2件とする。
- 第2条 自然史研究振興賞受賞候補者を選考するため、自然史研究振興賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は代議員の推薦により4名を選出する。委員長は委員の互選により毎年定める。委員の任期は2年以内とし、毎年2名を改選する。ただし任期満了後2年間は再任されない。
- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者・団体を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者・団体が無い場合も、その旨を会長に報告する。
- 第5条 選考委員が被推薦者となり選考の最終段階まで候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者・団体について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者・団体として決定し、直ちに本人・団体に通知をする。また、受賞候補者・団体が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者・団体が無いことを会員に公表する。
- 第7条 受賞者・団体の決定は授賞式が行われる3ヶ月前までに行う。
- 第8条 授賞式は大会において行い、受賞者・団体には賞状および賞準備金より賞金10万円を贈呈する。
- 第9条 受賞者・団体は受賞の対象となった研究・活動について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演する。
- 第10条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

第 73 回日本生態学会 京都大会(ESJ73)開催報告

門脇 浩明 (ESJ73 大会企画委員会 企画委員長)

2026年3月11日から15日まで、京都大学吉田キャンパスと国立京都国際会館の2会場をオンサイト会場として第73回日本生態学会を開催した。ESJ73では、ハイブリッド大会として開催された札幌大会(ESJ72)を踏襲し、オンサイトを基本としつつも、視聴者数が低迷していたリアルタイム配信などは削減し、一部の講演についてはオンデマンド配信する形態で実施した。大会のオンサイト開催の要望が多い一方で、講演のオンライン配信を必要とする声もある中、最適なハイブリッド大会のあり方を模索し、大会の準備に尽力くださった実行委員会、企画委員会の皆さまには多大なご貢献を頂いた。大会にご参加頂きました皆さまにも感謝申し上げます。本稿では、28年ぶりの京都開催となったESJ73の成果と課題について、(1)開催概要、(2)大会運営改革と新しい試み、(3)参加者評価、(4)今後の展望、の順に振り返りたい。

(1) 開催概要

ESJ73は、2026年3月11日から13日(前半3日間)までを京都大学吉田キャンパス、14日と15日(後半2日間)を国立京都国際会館をオンサイト会場として、ならびに、3月中旬から4月5日まではらくらくカンファレンス(旧ONLINE CONF)をオンライン会場として、開催された。基本方針は、オンサイトを軸としたハイブリッド大会で、オンラインのみのポスター発表を除く全ての発表がオンサイトで行われた。

オンラインではポスター発表、ジュニアポスター発表(旧高校生ポスター)の掲示、受賞講演や総会に加えて、企画者が配信を希望するすべての集会系企画のオンデマンド配信が行われた。オンサイト会場である京都大学キャンパスは吉田南構内の3つの建物(総合館、国際高等教育院棟、4号館)の一部を借りて実施し、最大15の平行セッションを可能にした。国際会館は、Annexホールとイベントホールを主に活用して、受賞講演やERシンポジウム、ポスター発表・ジュニアポスター発表などを実施した。会場費の高騰と会場予約日程の制約から2会場での分散開催を余儀なくされ、大会参加者には移動の不便をおかけ

することになってしまったが、それぞれの会場の特徴を生かしたプログラムを編成することができたと考えている。

オンライン会場としては、オンラインプラットフォーム(らくらくカンファレンス)を採用した。ESJ69以来大会のオンラインプラットフォームとして活用されてきており、毎年の企画委員会の尽力により様々な機能がカスタマイズされている。大会のスケジュール、各講演情報の掲示に加えて、講演のオンデマンド配信、参加登録、名札や領収書の発行、各講演へのコメント、講演者へのメッセージの送受信、講演要旨検索、ポスター審査やジュニアポスター審査、受賞者への賞状の発行など、大会運営を成立させるうえで欠かすことのできない要素であり、多くの参加者に好評を得ている。大会にはオンライン、オンサイト含めて合計3,272名の参加があり、申し込み数は、シンポジウムが29件、自由集会在37件、フォーラムが7件、口頭・ポスターを併せた一般講演が1,309件、ジュニアポスターが129件で、これまで東京大会の記録を塗り替え、過去最多を記録した。らくらくカンファレンスについては、3月8日~15日のオンサイト期間中の合計ページ閲覧数が175111回、合計ページ訪問ユーザー数は延べ140997人となりました。オンサイト期間終了後(3月16日~4月5日)の合計ページ閲覧数は28644回、合計ページ訪問ユーザー数は延べ37920人となり、オンサイト期間中にも、その後も、多くの利用があったといえる。また、オンデマンド配信動画は合計3243回再生されており、オンデマンド配信に一定のニーズがあることも改めて確認できた。

(2) 大会運営改革と新しい試み

今大会は、理事会での指摘をうけて大会運営のスリム化をテーマに掲げつつも、多様な立場の方々に参加しやすい学会づくりを目指すというバランスを重視した運営方針に従って、大会準備を進めた。会場費の削減のため、国際会館に加えて、多くの会場を必要とする平行セッションを会場費の安い大学で開催する分散開催とした。よって、口頭発表やシンポジウム・自由集会などを京大会場で実施し、ポスター発表および受賞講演などを国際会館会場で実

施した。大会のアンケートでは、ESJ73において2会場での開催方式とした点について、およそ90%の参加者から支持された。しかしながら、今大会のようにすべての大会運営機能を2拠点設ける形式での開催は実行委員会に多大なる負担をかけることにつながることに留意すべきである。ESJ72にて利用者が低迷していたリアルタイム配信やSpatialChatなどオンライン要素を削減したこともESJ73での重要な変更点である。

ESJ73では大会運営会各特別委員会（タスクフォース）での検討を受け、1人1講演の原則を敷き、従来認められていた自由集会和一般講演（口頭・ポスター）の重複発表を不可とし、プログラム編成作業の負担軽減を実施した。審査員の負担が課題となっていた英語口頭発表賞については、賞の設置が一定の国際化推進の役割を果たしたものと評価を受けて、今大会から賞を廃止した。それに伴い、ポスター発表と同様に、口頭発表のセッションでも日本語発表と英語発表を同じセッション内に共存させ、日本語を母国語としない方は常にいずれかの会場で英語発表を聴講できるような編成を行うことが可能となった。この編成は大会アンケート結果からも好評であったことがうかがえる。これらの大会運営スリム化が大会参加者の大会参加の満足度にどのような影響を与えたのかについて、タスクフォースや将来計画委員会で引き続き議論を行い、大会の魅力を維持しつつ運営スリム化をさらに進めるための方針を定めていく必要があると考えられる。

ESJ73企画委員会では、運営部会がイニシアチブをとってSlackを用いた企画委員会・実行委員会の連携体制を構築し、ESJ72と比べて業務効率が格段にあがったと思われる。Slackで業務一本化によって、大会企画委員会のメーリングリストを廃止することも可能となった。また、運営部会は大会ホームページの大規模な改善を行い、その結果、大会企画委員会・実行委員会・事務局の問い合わせ対応の業務負担が大幅に軽減されたと考えている。口頭発表ファイルの収集については、ESJ72の事前のDropboxへのアップロード形式をやめ、スピーカーレディールームに発表者がUSBやCDRに保存したファイルを持参してもらうというコロナ以前の方式を復活させた。

より多様な立場の方が参加していただけるよう、いくつかの新しい取り組みを行った。第一に、障がい者への個別対応合理的配慮窓口を設置した。第二に、大会行動規範を設定し参加者が気持ちよく大会に参加していただくためのルールを明確にした。第三に、口頭発表者自身が事前録画をプラットフォームにアップロードできるセルフオンデマンド方式を採用した。第四に、受賞講演については同

時翻訳アプリNottaを用いることで、日本語を母国語としない参加者にも日本語での講演を英語字幕で楽しんでもらえるように配慮した。これらの取り組みのうち成功したものもあれば成功しなかったものもあったと評価している。

(3) 参加者評価

大会アンケートにご回答頂き、貴重なご意見をお寄せ頂いた449名（参加者3272人の13.7%）の皆さまに感謝を申し上げます。ここでは、アンケートの結果を私の主観で振り返りたい。ESJ73全体の満足度を10段階で伺った結果、多くが満足度「8」以上であったが、ESJ72より「8」以上の割合が9%減少（「7」以上は同程度）であった。この結果は、多くの参加者が一定程度の満足を感じていたことといえる。高評価の理由としては、オンデマンド配信、運営や全体アナウンス（らくらくカンファレンス）、体験を評価するご意見が多かった。一方で、低評価となった理由については、京大会場のキャパシティ不足や過密なスケジュール、オンライン参加者の不公平感や、大学後期入試日程との重複などが挙げられた。

オンラインコンテンツの利用については、95%の参加者がオンラインポスターを閲覧、31%がオンラインポスターにコメント、35%がオンデマンド配信動画を視聴、13%が口頭発表のセルフオンデマンド動画を視聴したと回答があった。オンラインコンテンツに対する満足度は、10点（24.6%）と8点（24.4%）が最も多かった。その理由としては、大会の情報インフラや情報の網羅性や参加機会の平等性を望むという意見、パラレルセッションが非常に多いため見逃し配信を重宝する意見や、オンラインでしか参加できない育児中の参加者から継続を望む声があった。一方で、オンラインコンテンツでのコミュニケーションの質を疑問視する声もあり、大会参加費の高騰の原因になるのであればより簡素化するなどの見直しをおこなうべきという声もあった。

大会参加費の料金設定についての質問への回答としては、34%の参加者が「とても高いと思う」、43%の参加者が「やや高いと思う」を選択しており（合計77%）、札幌大会よりも10ポイント程度、参加費が高騰していると考えられる参加者の割合が増加した。自費で参加している方や若手研究者（ポスドク）からSOSともいえる声が届いている。すべてのサービス使用料が高騰しているいま、同様のプログラム編成を同規模の会場で開催したとしても毎年大会参加費は上昇してしまう。今後は、生態学会大会の魅力を維持しつつ、大会運営のさらなるスリム化を推進し、

大会参加費を抑制したバランスのとれた運営を実現することを目指すべきであると考え。

(4) 今後の展望

ESJ73は、ESJ72のハイブリッドでの大会形式を踏襲しつつも、肥大化した大会運営を振り返り、大会運営改革路線に舵を切った初めての大会であった。大会運営業務の効率化を進めることで、さらなる大会の大規模化にも対応可能な企画委員会の体制を構築することができた。実際に大会を終えて、参加者数が3272名と過去最大を記録し、集会数やポスター発表数をみても、大きな成功を収めることができた大会であったといえる。しかし、参加者数が過去最大を記録し多くの参加費収入があり、自治体からの助成金や企業からの協賛金を加えると、当初の予算を500万円も上回る収入を得ることができたにもかかわらず、大会会場費の高騰によって大会収支の黒字化は叶わなかった。そして忘れてはならないのは、現在の参加費は、大会を運営する企画委員会や実行委員会のメンバーのボランティアによってはじめて成り立っているということである。この事実は、現在の大会運営のありかたと大会参加費を抜本的に見直す必要があることを示唆している。

すべてを無駄として切り落としていけば、大会参加費を安くすることはできる。しかし、それは生態学会大会の魅力をも失うことになりかねない。そのバランスをどのようにとっていくのかは非常に難しい問題なのである。

謝辞

最後になりましたが、大会の準備と運営にあたり、ご協力頂いた方々に厚く御礼申し上げます。全員の名を挙げることはできませんが、特にご尽力頂いた方々の名前を挙げてさせていただきます。

大手信人さん（大会会長）、土居秀幸さん（大会実行委員長）をはじめとする実行委員会のみなさま、企画委員会の北村俊平さん（大会企画副委員長）、伊藤公一さん（運営部会長）、槻木玲美さん（シンポジウム部会長）、松村健太郎さん（ポスター部会長）、辻冴月さん（ジュニアポスター部会長）、大庭ゆりかさん（発表編成部会長）、安立美奈子さん（英語口頭発表部会長）、山北剛久さん（オンライン部会長）をはじめとする大会企画委員のみなさま、大会運営改革タスクフォース、学会執行部、事務局のみなさまに心から感謝いたします。

また、各種審査員を務めてくださったみなさまにも感謝申し上げます（順不同、敬称略）。皆さまのご尽力に改めて御礼申し上げます。

審査員名前リスト

ポスター審査員：

安藤正規、安野翔、伊勢武史、伊東康人、伊藤岳、伊藤美菜子、伊藤陽平、井出純哉、磯村尚子、稲垣善之、宇野裕美、塩尻かおり、横井智之、横溝裕行、下野綾子、河合清定、梶田瑠依、梶本麻未、梶野浩史、甘田岳、丸岡奈津美、岩田繁英、鬼頭健介、吉村謙一、宮園誠二、宮下直、宮田真衣、橋詰茜、橋本佳延、橋本啓史、橋本徹、鏡味麻衣子、栗和田隆、古川真莉子、後藤暁彦、向井貴彦、荒木希和子、高屋浩介、黒川瞬、今西亜友美、今田弓女、佐久間大輔、佐橋玄記、細野将汰、三浦真紀、三島慎一郎、山口沙耶、山崎裕治、寺田知功、篠原直登、秋野順治、小山明日香、小出大、小城伸晃、小川みふゆ、小宅由似、小長谷達郎、小柳知代、松山周平、松前ひろみ、松尾奈緒子、植山雅仁、新井宏受、森豊彦、森茂太、深川幹、深谷肇一、神部飛雄、清古貴、西尾治幾、西廣淳、青柳優太、石井直浩、石田清、石濱史子、赤路康朗、設楽拓人、川田尚平、浅田寛喜、大園享司、辰巳晋一、檀浦正子、竹重龍一、竹内剛、竹内やよい、竹内勇一、中川光、中島啓裕、中島慶次、長谷川功、長田穰、槻木玲美、辻祥子、鶴井香織、天野一葉、渡部俊太郎、渡辺拓実、嶋村 鉄也、東垣大祐、藤原愛弓、藤田剛、藤田早紀、藤本真悟、内井喜美子、日下部玄、浜端朋子、富田幹次、福家悠介、平館俊太郎、平山貴美子、片山昇、片山直樹、堀田亘、堀内勇寿、野間直彦、柳川亜季、林亮太、鈴木透、脇坂英弥、脇坂啓子、姚遠、寫本樹、澤島拓夫、瀬戸美文

ジュニアポスター審査員

伊藤僚祐、井上智美、榎本孝晃、河合清定、甘田岳、岩下源、吉村友里、宮園誠二、宮崎祐子、宮田理恵、橋本佳明、玉田祐介、栗和田隆、古澤惇平、江川知花、荒木祥文、佐賀達矢、佐藤駿、坂本洋典、山口沙耶、山崎遥、山崎曜、酒井理、勝原光希、小山明日香、小島渉、小林正樹、神部飛雄、石黒智基、川津一隆、大貫溪介、大崎晴菜、大竹裕里恵、大坪雅、鶴井香織、土屋健司、藤田宏之、藤田知弘、栃木香帆子、飯島大智、福家悠介、米谷衣代、目戸綾乃、野村翔太、矢追雄一、李俊男、鈴木碩通

記事

1. 一般社団法人日本生態学会 2026 年度定時総会（第 73 回大会会員総会、2026 年 3 月 14 日、代議員 22 名・会員 70 名参加）および代議員会、各種委員会において報告・承認・決議された事項

A 報告事項

1. 事務局報告

a. 2025 年度会員数・学会誌発行状況

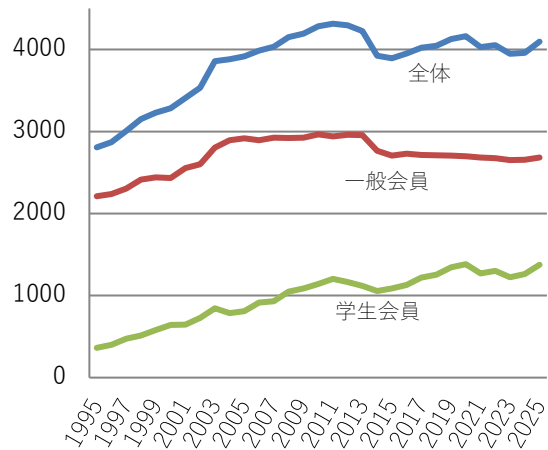
会員数（各年 12 月末現在）

| | 2024 年 | | | 2025 年 | | |
|-----|--------|------|------|--------|------|------|
| | 一般 | 学生 | 合計 | 一般 | 学生 | 合計 |
| 北海道 | 252 | 124 | 376 | 257 | 155 | 412 |
| 東北 | 168 | 98 | 266 | 174 | 105 | 279 |
| 関東 | 987 | 437 | 1424 | 1009 | 476 | 1485 |
| 中部 | 361 | 153 | 514 | 356 | 156 | 512 |
| 近畿 | 458 | 285 | 743 | 468 | 291 | 759 |
| 中四国 | 183 | 75 | 258 | 182 | 87 | 269 |
| 九州 | 211 | 83 | 294 | 199 | 97 | 296 |
| 外国 | 37 | 6 | 43 | 38 | 10 | 48 |
| 小計 | 2657 | 1261 | 3918 | 2683 | 1377 | 4060 |
| 賛助 | | | 32 | | | 29 |
| 名誉 | | | 7 | | | 7 |
| 小計 | | | 39 | | | 36 |
| 合計 | | | 3957 | | | 4096 |

会費納入率（各年 12 月末現在）

| | 2024 年 | | 2025 年 | |
|-----|--------|------|--------|------|
| | 一般 | 学生 | 一般 | 学生 |
| 北海道 | 94.0 | 69.4 | 94.9 | 80.0 |
| 東北 | 92.9 | 80.6 | 94.8 | 74.3 |
| 関東 | 94.8 | 76.9 | 94.9 | 78.2 |
| 中部 | 96.1 | 74.5 | 91.9 | 78.2 |
| 近畿 | 95.4 | 74.7 | 94.4 | 82.1 |
| 中四国 | 94.0 | 86.7 | 94.0 | 78.2 |
| 九州 | 93.8 | 68.7 | 90.5 | 79.4 |
| 海外 | 86.5 | 83.3 | 73.7 | 90.0 |
| 全体 | 94.7 | 75.7 | 93.7 | 79.1 |

会員数推移



日本生態学会誌 75 巻

| | 1 号 | 2 号 |
|------|-----|-----|
| 発行部数 | 300 | 320 |
| 配本部数 | 300 | 298 |
| 残部数 | 0 | 22 |

保全生態学研究 30 巻

| | 1 号 | 2 号 |
|------|-----|-----|
| 発行部数 | 800 | 770 |
| 配本部数 | 748 | 742 |
| 残部数 | 52 | 28 |

b. 庶務報告（2025 年 4 月～2026 年 3 月）

1. 日本学術振興会より令和 7 年度科研費（国際情報発信強化 OA 刊行支援）の採択通知があった（4 月 1 日）
2. 法務局に 2025 年定時総会にて就任した理事・監事交代を申請し登記された（4 月 7 日）
3. 日本学術振興会へ令和 6 年度科研費（国際情報発信強化 OA 刊行支援）実績報告書を送付した（5 月 7 日）
4. 会各賞の応募を開始した（6 月 1 日）
5. 第 23 回生態学琵琶湖賞授賞式・受賞記念講演を滋賀県立琵琶湖博物館で行った（6 月 28 日）
6. 日本テレビ放送網株式会社にドラマ番組への美術協力として和文誌 10 冊を貸し出した（9 月 17 日）
7. 次々期会長候補および次期代議員選挙の開票をオンラインにて行った（11 月 11 日）
8. 学会賞選考委員会に推薦された生態学会賞・宮地賞・奨励賞（鈴木賞）・自然史研究振興賞候補者が理事会メール審議にて承認された（12 月 2 日）
9. 理事会にて推薦された功労賞候補者が代議員メール審議によって承認された（1 月 14 日）

10. 内藤記念科学振興財団への褒賞候補者および国際会議開催助成金申請者の推薦、当該事業の審査にあたる選考委員候補者推薦への協力を会長名で承諾した(2月10日)
*他、各種集会への後援名義使用承認 10 件、賞・助成への学会推薦 3 件

c. 会計報告 (2025 年 3 月～2026 年 3 月)

1. (株) シーエーブイへ ESJ72 ライブ・オンデマンド配信費用として 6,159,340 円を支払った(4月8日)
2. (株) コンベンションリンクージへ ESJ72 札幌コンベンションセンター利用機器他諸費用として 3,272,098 円を支払った(4月8日)
3. 国際文献社へ ESJ72 大会関連委託費として 4,224,060 円を支払った(4月14日)
4. Wiley 社へ 2025 年英文 3 誌発行費として 7,211,100 円を支払った(4月25日)
5. AGRI SMIL へ ESJ72 プラットフォーム利用料として 4,015,824 円を支払った(4月30日)
6. 土倉事務所へ生態誌 74 巻 2 号印刷費として 704,000 円を支払った(5月14日)
7. 土倉事務所へ保全生態学研究 29 巻 2 号印刷費として 1,336,500 円を支払った(5月14日)
8. Wiley 社より 2025 年 ER ロイヤルティと 2024 年 3 英文誌ロイヤルティとして 10,706,558 円の入金があった(6月6日)
9. 東京大学へ EAFES 会場費として 1,342,500 円を支払った(6月23日)
10. 令和 7 年度科研費(国際情報発信強化 OA 刊行支援) 前期分として 5,000,000 円の入金があった(6月30日)
11. 各地区会へ地区会活動費を送金した(7月8日)
12. 国際文献社へ会員管理委託費 4～6 月分 1,521,630 円を支払った(7月9日)
13. イギリス生態学会展示ブース費用として 310,866 円を支払った(7月23日)
14. ESJ74 (2027 年 3 月開催) 富山国際会議場使用料として 2,372,250 円を支払った(8月8日)
15. 国際文献社へ日本生態学会誌 75 巻 1 号出版費として 1,369,346 円を支払った(8月15日)
16. 国際文献社へ保全生態学研究 30 巻 1 号出版費として 1,485,792 円を支払った(8月15日)
17. 東京化学同人より「生態学入門第 2 版」出版印税として 229,040 円の入金があった(8月25日)
18. 国際文献社へ会員管理委託費 7～9 月分 32,166,004 円を支払った(10月21日)
19. 令和 7 年度科研費(研究成果公開促進費) 後期分として

- 5,900,000 円の入金があった(11月1日)
20. みずほファクターより 2026 年会費口座自動引落分として 2,857,500 円の入金があった(12月12日)
21. (株) シンクネイチャーより自然史研究振興賞寄附金として 20 万円の入金があった(12月26日)
22. 国際文献社へ会員管理委託費 2025 年 10-12 月分として 969,527 円を支払った(1月19日)
23. 東京化学同人より「生態学入門 2 版」出版印税として 277,200 円の入金があった(1月23日)
24. Wiley 社へ Commissioned Contributions for PSBI 2026 として 3,201,900 円を支払った(1月23日)
25. Wiley 社へ ER・PE Publishing Fee として 4,000,000 円を支払った(1月27日)
26. 2025 年度の会計監査が Web 会議システム (Zoom) で行なわれ、会計は適正に行なわれたことが確認された。(2月9日)

2. 大会企画委員会

○大会開催方針概要

- ・ オンサイトを主体としたハイブリッド形式で開催とし基本的に札幌大会を踏襲
- ・ 大会参加費は一般 19000 円(早期 17000 円)、学生 9500 円(早期 8500 円)と札幌大会から変更なし
- ・ オンラインでは、ポスター発表・ジュニアポスター発表の閲覧に加えて、授賞式、受賞講演、シンポジウム、自由集会など各種集会のオンデマンド配信が視聴可能。一部口頭発表については発表者がらくらくカンファレンスに録画した発表動画をアップし、オンデマンド配信による視聴も可能。
- ・ 前回大会で視聴者数が低調であったリアルタイムを廃止し、利用者の少ない SpatialChat も廃止した
- ・ 申し込みシステムは国際文献社に依頼し、大会プラットフォームとしては、AGRI SMILE 社のらくらくカンファレンス(旧 ONLINE CONF)を利用した。
- ・ 大会日程を 5 日間(3月11日～15日)とし前半 3 日間を京大会場、後半 2 日間を国際会館会場で開催することとした
- ・ 最大 15 のパラレルセッション、ポスター発表と集会企画数からみて過去最大規模の大会となる見込みである
- ・ 口頭発表については当日あるいは前日にスピーカーレディールームで発表ファイルを登録する(USB あるいは CDR で発表者がファイルを持参)
- ・ 以外の集会は会場に発表ファイルを持ち込んで発表を行う形式とした。

◎大会申込状況

参加者数

| 回 | 開催地 | 有料 | 無料 | 合計 |
|-----------|-----------|-------------|-------------|-------------|
| 64 | 東京 | 2090 | 724 | 2814 |
| 65 | 札幌 | 1885 | 421 | 2306 |
| 66 | 神戸 | 2003 | 796 | 2799 |
| 67 | 名古屋 | 1608 | 299 | 1907 |
| 68 | 岡山 | 1974 | 738 | 2712 |
| 69 | 福岡 | 1969 | 743 | 2712 |
| 70 | 仙台 | 1741 | 749 | 2490 |
| 71 | 横浜 | 1743 | 687 | 2452 |
| 72 | 札幌 | 1902 | 569 | 2471 |
| 73 | 京都 | 2265 | 1007 | 3272 |

一般発表件数

| 回 | 開催地 | ポスター | 口頭 | 高校生 | シンポ | フォーラム | 自由集会 |
|-----------|-----------|-------------|------------|------------|-----------|----------|-----------|
| 64 | 東京 | 955 | 264 | 52 | 14 | 9 | 52 |
| 65 | 札幌 | 899 | 216 | 45 | 19 | 7 | 46 |
| 66 | 神戸 | 918 | 269 | 81 | 21 | 12 | 32 |
| 67 | 名古屋 | 928 | 295 | 60 | 31 | 7 | 29 |
| 68 | 岡山 | 708 | 224 | 35 | 17 | 11 | 20 |
| 69 | 福岡 | 848 | 235 | 49 | 28 | 9 | 23 |
| 70 | 仙台 | 683 | 241 | 68 | 10 | 10 | 20 |
| 71 | 横浜 | 709 | 227 | 63 | 20 | 9 | 21 |
| 72 | 札幌 | 863 | 326 | 62 | 17 | 10 | 28 |
| 73 | 京都 | 1013 | 296 | 129 | 29 | 7 | 37 |

(文責：門脇浩明)

3. Ecological Research 刊行協議会

2026年3月4日(水) 13:00-15:00 に刊行協議会をオンラインで開催し、編集長、副編集長、出版担当理事、編集幹事3名、編集委員23名、ワイリー・パブリッシング・ジャパン2名、編集部7名が出席した。

1. 出版・編集状況

- Vol. 40 (2025) として計 84 報、1,041 ページを出版した。
(※Vol. 39 は計 81 報、987 ページ)
- 2025 年の投稿数は 260 報：過去 10 年間で投稿数が最も少なかった昨年の 202 報から回復し、例年並みとなった。
- 受理数は 66 報：採択率は 30.4%で、昨年の 38.3%より低下した。日本からの投稿は高い採択率 (>60%) が維持されており、受理数も増加傾向だが、海外からの投稿は国によって

採択率が低い。

- 2025 年は、投稿から First Decision までの日数が 61 日 (査読を経た原稿の中央値；前年に比べて +6 日)、受理までの日数が 166 日 (中央値；前年に比べて +9 日) となった。
- Journal Impact Factor (2025) は 1.4 で、前年から 0.3 ポイント低下したが、カテゴリ全体で JIF が低下しており、JIF Rank Percentile (Ecology) は 35.8 (Q3) とわずかな低下に留まった。2026 年は IF の上昇が見込まれている (推計値 1.6)。
- オープンアクセス (OA) 論文は 41 報で、その割合 (48.8%) は年々上昇している (2024 年は 46.3%)。引き続き、会員の皆様には学会による OA 費補助制度を活用していただきたい。

| 年 | 2020 | 2021 | 2022 | 2023 | 2024 | 2025 |
|-----------------------|-------|-------|------|------|------|------|
| 投稿数 | 263 | 267 | 244 | 263 | 202 | 260 |
| 受理数 | 99 | 76 | 76 | 58 | 91 | 66 |
| 受理率 | 34% | 30% | 33% | 26% | 38% | 30% |
| Journal Impact Factor | 1.917 | 2.056 | 2.0 | 1.7 | 1.4 | - |
| JIF Rank Percentile | 32.83 | 30.35 | 40.1 | 37.2 | 35.8 | - |

2. 編集体制

- 2026 年 1 月より正副編集長が交代した。新たに就任した正副編集長、編集幹事・編集委員は次のとおり。新体制スタートに伴い、投稿数と投稿分野に合わせた編集体制の見直しを図っている。

編集長：兵藤 不二夫 (岡山大)、副編集長：村上正志 (千葉大)

編集幹事：大園 享司 (同志社大) 瀧本岳 (東京大) 津田 吉晃 (筑波大)

編集委員：稲垣善之 (森林総研) Veronika Jílková (Republic Biology Centre of the Czech Academy of Sciences) 壁谷大輔 (森林総研) 兼子伸吾 (福島大) 片山歩美 (九州大) 片山昇 (小樽商科大) 松岡俊将 (京大) 設楽拓人 (森林総研) Lijuan Sun (Lanzhou Univ.) 鈴木智之 (北海道大) 寺本宗正 (鳥取大)

3. Ecological Research Award 2025 受賞論文

- 編集委員および編集幹事の投票により 5 編を選出し、理事会の承認を経て決定した。

4. 出版形態の変更と PDF デザイン改訂

- ワイリー社による取扱全誌対象の方針により、昨年 5 号より Early View が廃止され、オンライン出版と同時に最新号に収録される、Continuous Publication へと移行した。号内の掲載順は出版日を基準とし、カテゴリごとには分かれぬ。これに伴い、特集論文も今後は通常号に収録され、別途作成さ

れる特集 Virtual Issue ページにも順次掲載されて特集号が組み上がる仕組みとなった。

- PDF のデザインが刷新され、タイトルページや References のスタイルが改訂された。詳しくはジャーナルのウェブサイトを参照されたい。

5. その他

- 昨年京都で開催された、国際蛇紋岩植生会議の発表をもとにした特集論文が投稿審査され、一部は既に出版されている。また、アジア太平洋生物多様性観測ネットワーク (APBON) からの特集も予定されている。特集企画では、関連する論文をまとめて掲載することで認知度の向上が期待される。1報は日本生態学会の負担により OA となる。特集企画をお考えの方は編集部にぜひお問い合わせいただきたい。

(文責：兵藤不二夫)

4. 日本生態学会誌編集委員会報告

1) 発行状況

年2号(3月と9月)電子版をJ-STAGEで公開、冊子320部を発行、冊子購読会員は年間2,000円、一般販売は2,500円/冊(保全誌と同額)を発行。2025年に75巻1,2号(合計175頁)、2026年3月に76巻1号(37頁)を発行(2022年:214頁、2023年:78頁、2024年137頁)

2) 編集状況(原著論文, 総説論文, 学術情報, コメント)

2022年受付の11原稿(0,4,6,1)は、受理10・却下1。
2023年受付の29原稿(1,12,12,4)は、受理28・却下1。
2024年受付の10原稿(5,3,2,0)は、受理7・却下3。
2025年受付の16原稿(5,5,4,2)は、受理7・却下4・審査中5。
2026年受付の1原稿(1,0,0,0)は、却下1。

3) 生態誌編集委員会(刊行協議会)を2026年2月4日にオンラインで開催した。

(文責：竹内やよい)

5. 保全生態学研究編集委員会報告

I. 刊行状況

- 発行を依頼する業者が土倉事務所から国際文献社に変更された。
- 国際文献社の担当となった2025年発刊の30巻1号、2号は多少の遅延は発生したものの、おおむね予定どおり出版された。
- 2026年発刊の31巻1号も5月発刊に向けて準備が進んでいる。

II. 編集状況

- 2025年の投稿数はおおむね2023年以前の水準に戻った。

(以下は参考資料)

1. 2026年1~2月(2026年2月15日現在)

| | 原著論文 | 総説 | 調査報告 | 実践報告 | 解説 | 保全情報 | 学術提案・巻頭言 | 計 |
|------|------|----|------|------|----|------|----------|---|
| 新規投稿 | 1 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 1 | 5 |
| 受理 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 |
| 却下等 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 審査中 | 1 | 1 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 |

2. 2025年1月~12月

| | 原著論文 | 総説 | 調査報告 | 実践報告 | 解説 | 保全情報 | 学術提案・巻頭言 | 計 |
|------|------|----|------|------|----|------|----------|----|
| 新規投稿 | 15 | 0 | 13 | 2 | 1 | 2 | 1 | 34 |
| 受理 | 7 | 0 | 6 | 0 | 1 | 2 | 1 | 17 |
| 却下等 | 2 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 |
| 審査中 | 6 | 0 | 5 | 2 | 0 | 0 | 0 | 13 |

2024年新規投稿数25編：受理15編、却下・取り下げ9編、審査中1編

2023年新規投稿数34編：受理25編、却下・取り下げ8編、審査中1編

2022年新規投稿数35編：受理28編、却下・取り下げ7編

(文責：大澤剛士)

6. 自然保護専門委員会報告

日時：2026年2月4日(水) 16:00-18:30 リモート会議にて開催

【審議事項】

- 2025年度事業の決算について(381,600円)
- 2026年度事業計画及び予算(アフターケア活動費用等含む:300,000円)
- 2026年度-2027年度の地区選出および専門別委員候補について
任期の終了に伴い、次期地区選出および専門別委員、および委員長、副委員長、幹事の選出を行った。
・専門別委員の角野委員が退任を希望されたことを受け、後任として北海道地区選出の露崎委員が担当。また、要望書作成に係る北海道地区選出委員の負担が増加していることから、委員の枠を2名から3名に増員。
・気候変動等に対する生態系モニタリングの重要性が高ま

っていることから、専門別委員として「生態系モニタリング」の枠を新たに増設。

- ・次期委員長は関島委員、副委員長は和田委員が選出。幹事は2名体制とし、1名は現幹事の久保委員、もう一人は高嶋委員（琉球大）が選出。

【報告事項】

1. 自然保護専門委員会の活動報告（2025年度）
 - 「苫東厚真風力発電に係る要望書」を事業者、環境大臣、経産大臣、北海道知事に提出し、記者会見を実施（8社が参加）
 - 「長崎県宇久島太陽光発電に係る要望書」を事業者に提出し、記者会見（10社が参加）
2. 作業部会報告・アフターケア委員会報告
3. 各地区会報告

（文責：関島恒夫）

7. 将来計画専門委員会報告

1. 委員の任期について
 - ・任期を定め、10年を目安にすることとなった。
 - ・2027年3月を目途に、10年以上になる委員に意思確認をする。
2. 生態学会の賞について
 - ・宮地賞と鈴木賞、大島賞と自然史賞のオーバーラップや性格の違いについて議論が行われ、それぞれの賞の趣旨を明確化する必要性が指摘された。
 - ・鈴木賞については応募者数の多さや若手賞の年齢・キャリア要件の在り方を踏まえ、受賞者数の増加や分野別化、博士号取得後の位置づけの再検討などが提案された。
 - ・選考負担の軽減や公平性確保の観点から、募集要項とは別に詳細な内部選考マニュアルや受賞者統計を整備する必要性も共有された。
3. フォーラムについて
 - ・次年度以降のフォーラムでは、AI活用、学術の未来、生態学の役割、教育連携、研究室ネットワーク形成など多様なテーマが提案され、将来計画委員会として柔軟に企画すべきとの意見が共有された。
 - ・大会期間中の実施形態や他委員会との役割分担を整理しつつ、国際化や若手育成、グローバルデータ時代における研究の在り方（国際共同解析や海外研究の意義を含む）を議論する重要性が指摘された。
 - ・分野横断的に俯瞰し国際共同研究を主導できる人材の育成や、アジア地域を含む研究ネットワーク強化への期待も示された。
4. その他

- ・ポスター賞の評価がオンラインのみでよいのか。
- ・英語口頭発表賞の廃止に伴う変化を確認する必要性

（文責：塩尻かおり）

8. 生態学教育専門委員会報告

- ① 報告事項
 - 委員長・副委員長の交代（R9年度から）
 - 委員長を丑丸敦史から平山大輔氏に交代する
 - 副委員長を平山大輔氏から宮田理恵氏に交代する
 - 委員の就任
 - 非教育学部系枠：深野祐也氏が新委員に就任する
- ② 2025年度の計画
 - 1) 生態学会大会でのフォーラムの企画・開催
 - 2) 日本生態学会誌での連載「生態教育の今と未来」
 - 3) SSH 生徒研究発表会での生態学会の広報活動の継続

（文責：丑丸敦史）

9. 生態系管理専門委員会報告

- 2025年度活動報告
- ネイチャーポジティブの社会・政策の動きに応じた新たな委員会の活動展開
- 調査・提言部会
- ・国内外のネイチャーポジティブの評価に関する情報整理を進め、生態学会京都大会においてフォーラム（2026/3/13_「ネイチャーポジティブの評価」最前線）を開催。
 - ・前年度のグリーンインフラ・NbSの学会間会合を踏まえて、土木学会のシンポジウムにおける話題提供・参画（2025/10/31_ハイブリッドインフラに関するシンポジウム）。
- キャパシティビルディング部会
- ・自然共生サイトのフォーラム（U02_自然共生サイト・生態学者）を踏まえて、実践者の事例共有のオンラインセミナー（2025/12/21_つながる自然共生サイト）及び現地の生態系管理演習（2026/3/16_龍谷大学）を開催予定。
- 2026年度活動計画
- ①ネイチャーポジティブ評価の提案、②NbS・GIの推進、③自然共生サイトの実装
- ・ネイチャーポジティブの評価のあり方の整理や情報発信に取り組み、またNbS・GIの社会実装の推進を図るとともに、自然共生サイト等の生態学者の役割、保全活動等の情報発信、連携機会の構築を進める。

（文責：西田貴明）

10. 大規模長期生態学専門委員会報告

1. 国際研究ネットワーク (Research Networks)

■ ForestGEO: 世界 84 サイトの熱帯森林プロットを用いた長期観測ネットワーク

同種密度依存的死亡の普遍性、樹木空間分布の緯度パターン、菌根菌と樹木分布の関係、熱帯林の炭素動態

■ GeoTree: 森林プロット調査と航空レーザー・地上レーザー計測を統合した構造研究

■ LIFEPLAN: 世界 100 地点の統一手法による生物多様性調査。

昆虫・菌類を中心としたデータ収集と、AI・DNA 解析を用いたビッグデータ研究を推進

2. 国内ネットワーク

■ JaLTER (日本長期生態学研究ネットワーク)

- ・2025 年: JaLTER OSM (中川研究林) 開催
- ・JaLTER データベースを 国環研から DIAS へ移行
- ・2026 年: 設立 20 周年 (記念シンポジウム予定)

3. 国際政策ネットワーク (Policy Networks)

■ APBON: アジア太平洋地域の生物多様性観測の国際研究ネットワーク

- ・Essential Biodiversity Variables (EBV) 開発のための観測データ整備
- ・IPBES アセスメントへの参画
- ・NbS (自然に基づく解決策) 研究成果の共有

■ AOGEO: アジア・オセアニア地球観測に関する政府間委員会
・地球環境問題解決のための「地球インテリジェンス」の創出活動

- ・最後に「AOGEO Statement」としてまとめ、各国政府へ発信

4. 長期観測データの研究成果

■ 長期モニタリングデータの公開は国際的研究成果を創出

- ・モニ 1000 毎木データペーパー (Ecological Research)
- ・樹木バイオマス・アロメトリー研究 (Ecology)
- ・植物形質データベース論文 (引用 1580 以上 トップ1%論文)

5. 社会実装と研究基盤の強化

■ 森林 GX プロジェクト (東大-北大連携)

- ・カーボンニュートラル、ネイチャーポジティブ、循環経済を統合したモデル構築

■ 林冠観測クレーン建設 (苫小牧研究林)

- ・林冠への直接アクセスによる観測基盤の強化、完成予定: 2027 年 11 月

(文責: 中村誠宏)

11. 野外安全管理専門委員会報告

日時: 2026 年 2 月 24 日~3 月 9 日 メールにて実施

参加者: 中島、飯島、佐藤、鈴木、粕谷、北村、石原

●2025 年度活動報告

- ・2025 年度は、研究者のレジャー中における死亡事故はあったが、野外調査中における重大事故の報告は特になかった。クマなどの野生動物の出没状況が野外調査の支障になっている。

- ・73 回大会でのフォーラム開催の準備を進めた。

『野外調査に初めて行く人のための安全講習』

- ・書籍発売中

『フィールド調査のための安全管理マニュアル』日本生態学会 (監修)

朝倉書店

定価 2,750 円 (本体 2,500 円+税)

B6/184 ページ

ISBN: 978-4-254-18070-1 C3040

https://www.asakura.co.jp/detail.php?book_code=18070&srstid=AfmBOoohSKBTK2otvFF7TKZS62makN4vVse3XnVViOafleFpWUjDVwVl

2025 年 4 月 5 日 初版 1200 部

2025 年 4 月 25 日 2 刷 500 部

累計 2 刷 1700 部、朝倉書店内在庫: 270 部 (2026 年 3 月 6 日現在)

2026 年 3 月 6 日時点で、およそ 1400 部程度は販売できた。

●2026 年度活動予定

- ・74 回大会でのフォーラムの準備を行う。

- ・事故情報の収集と集約

野外調査・実習中の事故やヒヤリハット事象の例を引き続き収集し、解析を続ける。

クマなどの野生動物の出没状況が野外調査の支障になっている場合についても情報を収集したい。

該当の事例があれば、野外安全管理委員会に連絡をいただきたい。また、事故の報告書が大学・研究所等で出版された場合は、ご教示をお願いしたい。

- ・安全管理マニュアルの改訂

最新の情報と技術、および多様性を考慮した内容へのアップデートを引き続き行う。

(文責: 石原道博)

12. キャリア支援専門委員会報告

【2025 年度活動報告】

1. 京都幌大会での企画

- ・育児支援 (会場内への託児室とファミリー休憩室の設置、託児利用補助) の運営サポート
- ・活動紹介ポスターの掲示

2. その他

- ・男女共同参画学協会連絡会運営委員会への参加（年3回）
男女共同参画学協会シンポジウムへの参加・報告書作成
- ・女子中高生夏の学校でポスターを掲示、キャリア相談会へ参加、講師による実習を実施、学会ニュースレターに報告
- ・大会参加者属性アンケート解析
- ・キャリア支援フォーラム（オンライン開催）「好きな研究をしながら暮らすには」（2月6日）
- ・ダイバーシティ推進宣言に対応する取り組みの強化
「誰もが快適にフィールドワークを行うための野外調査マニュアル」の作成
- ・委員会 HP の更新

【来年度の活動計画】

1. 富山大会での活動

- ・キャリア支援・男女共同参画フォーラム
- ・育児支援（会場内への託児室とファミリー休憩室の設置、託児利用補助）の運営サポート
- ・キャリア支援相談室（個別面談、イベント）

2. その他の活動

- ・ダイバーシティ推進宣言に対応する取り組みの強化
「誰もが快適にフィールドワークを行うための野外調査マニュアル」の公表
- ・男女共同参画学協会連絡会運営委員会への参加（年4回程度）
- ・男女共同参画学協会シンポジウムへの参加（年1回）
- ・女子中高生夏の学校への参加
- ・大会参加者属性アンケート解析
- ・キャリア支援フォーラム（オンライン開催）

（文責：上野裕介）

13. 情報交流支援専門委員会報告

【Jeconet の運営状況について】

会員数：4255 人（3月6日現在）

配信数：約 4950 件（3月6日現在）

研究情報、人材募集情報、イベント案内など、情報交換に活用されている。

管理運営上の課題には委員会が理事会と連携して随時対応している。

Jeconet 参加会員のガイドラインの見直しを行い、公の場である Jeconet での配慮事項や禁止事項の明文化を図った。

【2026 年 4 月からの委員会体制（案）】

委員長 深谷肇一

委員 岩田容子, 上野真由美,

津田吉晃, 村岡裕由

（2026 年 3 月 2026 年度第 1 回理事会にて審議予定）

（文責：村岡裕由）

14. 監査報告

一般社団法人 日本生態学会監事

立田晴記・黒川紘子

当法人の 2025 年度の事業報告、計算書類、これらの附属明細書、そのほか理事の職務執行の監査について、次の通り報告する。

1. 監査の方法及びその内容

2025 年度を通じ、各監事が必要な調査を行い、その結果を監事間で協議して監査を実施した。具体的には、すべての理事会に出席し、重要な報告書等を随時閲覧した。さらに、必要に応じて、これらの内容について関係する理事に説明を求めた。また、事前に資料を電子媒体で受領した上で、2026 年 2 月 9 日に学会事務局と Web 会議システムで接続し、関係する会計書類を逐次閲覧した。

2. 監査の結果

- (1) 事業報告書及びその附属明細書は法令および定款に従い当法人の状況を正しく表示している。
- (2) 理事の職務の遂行に関し、不正の行為もしくは定款に違反する重大な事実はない。
- (3) 計算書類とその附属明細書は当法人の財産および損益の状況をすべての重要な点において適正に表示している。

以上

15. 英文 3 誌出版状況について

英文誌 3 誌出版体制

- ・2024 年 1 月より、日本生態学会は Ecological Research (ER 誌) に加えて、Population Ecology (PE 誌)、Plant Species Biology (PSB 誌) の出版元となっている。
- ・PSB を対象とした 2024 年度研究成果公開促進費（国際情報発信強化）オープンアクセス刊行支援について採択され、英文誌出版・宣伝の活動が行われている。
- ・2026 年 1 月より、Plant Species Biology は OA 誌として発行を開始した。
- ・2026 年 1 月より ER の編集長は富松裕編集長から兵藤不二夫新編集長に交替し、副編集長として村上正志 ER 編集委員が就任した。
- ・各誌の編集委員は年 1 報の OA 出版が提供されることになった。
- ・PSB 誌は OA 誌化に伴い、Continuous Publication（順次出版）となった。ER は 2025 年 9 月から、PE 誌は 2026 年

から順次出版に移行した。

研究成果公開促進費

- ・ International Conference on Serpentine Ecology (ICSE2025、6月13-17日、京都国際会議場) にブース出展
- ・ EAFES2025 (7月20-21日、東京大学) に出展
- ・ 第57回種生物学シンポジウム (12月20日) で開催した国際シンポジウム「アジアの擬態花研究の最前線、「The Frontiers of Floral Mimicry in Asia」は無料でオンライン配信を実施し、オンライン上で14か国、現地参加と合わせて、200名以上が参加した。
- ・ イギリス生態学会年会 (BES2025、2025年12月15-18日) にブース出展 (樋口裕美子 PSB 編集委員、Samuel R.P.-J. Ross ER 編集委員、横溝 裕行 ER 編集幹事・PE 編集長)。日本生態学会の出展継続には高い意義があるという結論 (報告書あり)。
- ・ 第57回種生物学シンポジウム (2025年12月19-21日) にブース出展。
- ・ 日本生態学会73回大会 (京都) (2026年3月11-15日) にブース出展。
ER シンポジウム「Toward an Old-Growth Concept for Semi-natural Ecosystems: Insights from Japanese Grasslands and Beyond」を開催予定。
フォーラム「英文書籍を出版しよう! Part3」を Springer 社と共同で開催予定。
- ・ 日本植物学会第90回大会 (野田) (2026年9月4-6日) にブース出展予定。

Wiley 社関連

- ・ 7月末に PSB の Gold-OA 誌化に伴う Wiley 社との契約更新完了。APC は USD1,650 および USD990 (Notes & Insights) (3学会員は9万円と5万円で出版できる)。
- ・ ER と PE の APC が 11月25日より USD3,000 から USD3,150 となった。日本生態学会による出版補助については変更無し。

Data Article

- ・ JaLTERDB があった国立環境研のサーバーが 2025 年末に停止したため、DIAS (<https://diasjp.net/>) サーバーに移行し DOI を付与した (ただし、現在、DIAS サーバーは停止中)。
- ・ 過去の出版論文のデータファイルについて、生態学会としてハードコピーを保存することになった (JaLTERDB についても学会での保存を検討中)。

OA 出版補助制度

- ・ PSB における 2025 年の OA 論文出版数は 26 報 (総数は 53 報) で、前年の 10 報から増加 (+EarlyView10 報)。13 報が

ESJ 出版補助を利用し、11 名が生態学会会員。PSB の編集委員は年 1 報の OA 費出版が提供されるが、これまでの利用者は 2 名 3 報。

- ・ ER における 2025 年の OA 論文出版数は 40 報 (総数は 90 報) で、前年の 38 報から微増。学会全額負担が 3 報、OA 補助利用が 10 報、ほかに所属機関の APC 制度内での著者負担額を学会が肩代わりするケースが 2 報。
- ・ PE における 2025 年の OA 論文出版数は 19 報 (総数は 28 報) で、前年の 9 報から大幅に増加。生態学会全額負担が 4 報、個体群生態学会全額負担が 1 報、OA 補助利用が 1 報、所属機関による APC の著者負担額を個体群生態学会が肩代わりが 1 報。
- ・ 2025 年の学会 APC 補助制度利用は計 9 報 (ER8、PE1) で、海外からの利用 1 報、関東地区会による利用 1 報。2026 年度は 1 報。ワイリーとの契約研究機関も増加しており、当初の想定通り、学会補助は補完的に利用されている (APC 契約のない所属機関の著者や、年度末で所属機関の APC 契約が利用できなくなった著者からのご利用が多いとの報告)。
- ・ 日本生態学会は Society Publishers' Coalition (SocPC, <https://www.socpc.org/>) に加入 (4月30日)。SocPC は欧米の主要学会が参加する、非営利の出版関連団体。
- ・ 世界的に AI 利用の論文執筆、査読について対策が必要になっているが、実効的な方法を模索している状態。

(文責: 出版担当理事久米篤)

16. 第76回大会(2029年)担当地区会に関する件

2029年3月の大会については、これまでの地区会持ち回り開催を大会運営改革 TF で検討中のため 2026年3月の総会審議には提案しないことが報告された。

B. 審議事項

第1号議案 役員退任に伴う改選に関する件

以下の役員候補者の改選について満場異議なくこれを可決承認した。

- ・ 任期満了により退任する役員 (任期: 2024.3 総会後~2026.3 総会まで)
理事: 北島薫、日浦勉、久米篤、木村恵、村岡裕由、相場慎一郎、石濱史子、森章、小林真、東樹宏和、竹垣毅、工藤岳、土居秀幸、西廣淳、中野伸一、吉田丈人
監事: 黒川紘子
- ・ 理事会推薦役員候補者 (任期: 2026.3 総会後~2028.3 総会まで)

理事：日浦勉（再任）、佐竹暁子、久米篤（再任）、木村恵（再任）、塩尻かおり、吉田丈人（再任）、富松裕、村岡裕由（再任）、西廣淳（再任）、赤坂宗光、保坂哲朗、瀧本岳、土居秀幸（再任）、小林真（再任）、森章（再任）
監事：木庭啓介

（参考）上記以外の任期中の役員（任期：2025.3 総会後～2027.3 総会まで）

理事：内海俊介（専務理事）、半場祐子（庶務担当）、山尾僚（会計担当）

監事：立田晴記

・正会員の投票による理事兼代表理事・会長候補者：日浦勉

第2号議案 2025年決算承認に関する件

当期（自2025年1月1日至同年12月31日）における決算案について満場異議なくこれを承認可決した。

<一般会計>

| 収入の部 | | | 支出の部 | | |
|-------------|--------------------|--------------------|------------------|--------------------|--------------------|
| 費目 | 25予算 | 25決算 | 費目 | 25予算 | 25決算 |
| 年会費 | | | 会誌発行費 | | |
| 会員（一般） | 25,000,000 | 25,531,500 | ER・PE・PSB | 7,200,000 | 7,200,000 |
| 正会員（学生） | 4,800,000 | 5,637,800 | 生態誌 | 3,000,000 | 2,524,731 |
| 賛助会員 | 600,000 | 538,000 | 保全誌 | 4,000,000 | 3,540,644 |
| 小計 | 30,400,000 | 31,707,300 | 会誌発送費用 | 200,000 | 491,087 |
| | | | 英文誌Open Access経費 | 10,000,000 | 7,662,364 |
| 科研費（OA支援） | 10,900,000 | 10,900,000 | 英文誌編集費 | 1,000,000 | 1,423,537 |
| 学会誌（和文誌）売上げ | 500,000 | 648,500 | 和文誌編集費 | 600,000 | 616,956 |
| 英文誌ロイヤルティ | 8,800,000 | 10,706,558 | 小計 | 26,000,000 | 23,459,319 |
| 出版印税 | 700,000 | 511,089 | | | |
| 論文掲載料 | 1,000,000 | 1,291,200 | 会議費 | 300,000 | 98,214 |
| 広告代 | 0 | 0 | 旅費・交通費 | 1,300,000 | 1,107,653 |
| 著作権使用料 | 150,000 | 138,219 | 人件費 | 21,000,000 | 21,716,584 |
| 大会収入 | 24,000,000 | 26,069,000 | 地区会活動費 | 2,186,355 | 2,129,335 |
| 寄附金 | 0 | 0 | 大会支出 | 25,000,000 | 28,189,659 |
| その他 | 6,000 | 67,249 | 個体群生態学会出版企画費 | 350,000 | 350,000 |
| EAFES東京参加費 | — | 14,534,000 | INTECOL会費 | 300,000 | 0 |
| 前年度繰越金 | 94,835,460 | 94,835,460 | | | |
| | | | 事務費 | | |
| | | | 通信費 | 200,000 | 168,733 |
| | | | 消耗品費 | 400,000 | 301,200 |
| | | | 雑費 | 300,000 | 318,746 |
| | | | 決済代行手数料 | 1,100,000 | 932,252 |
| | | | サーバ関連費 | 700,000 | 199,075 |
| | | | 事務所維持費 | 1,680,000 | 1,680,000 |
| | | | 小計 | 4,380,000 | 3,600,006 |
| | | | | | |
| | | | 各種委員会費 | 1,000,000 | 1,151,826 |
| | | | 広報費 | 1,300,000 | 1,444,337 |
| | | | 選挙費 | 250,000 | 365,975 |
| | | | EAFES費用 | 200,000 | 13,419,376 |
| | | | 講習会費 | 200,000 | 20,000 |
| | | | 会員管理委託費 | 4,700,000 | 5,049,820 |
| | | | 法人税 | 300,000 | 170,500 |
| | | | 次年度繰越金 | 82,525,105 | 89,135,971 |
| 合計 | 171,291,460 | 191,408,575 | 合計 | 171,291,460 | 191,408,575 |
| 単年度収入 | 76,456,000 | 96,573,115 | 単年度支出 | 88,766,355 | 102,272,604 |
| | | | 単年度収入-支出 | -12,310,355 | -5,699,489 |

<特別会計>

学会賞準備金（宮地・大島・鈴木賞・自然史研究振興賞）

| 収 入 の 部 | | | 支 出 の 部 | | |
|---------------|------------------|------------------|-----------|------------------|------------------|
| | 25 予算 | 25 決算 | | 25 予算 | 25 決算 |
| 前年度繰越金 | 9,074,934 | 9,074,934 | 賞金 | | |
| 寄附金（自然史研究振興賞） | 200,000 | 200,000 | 宮地賞 | 300,000 | 300,000 |
| 預金利息 | 0 | 10,424 | 大島賞 | 0 | 0 |
| | | | 鈴木賞 | 150,000 | 150,000 |
| | | | 自然史研究振興賞 | 200,000 | 200,000 |
| | | | 小計 | 650,000 | 650,000 |
| | | | 雑費 | 0 | 0 |
| | | | 次年度繰越金 | 8,624,934 | 8,635,358 |
| 合計 | 9,274,934 | 9,285,358 | 合計 | 9,274,934 | 9,285,358 |

<貸借対照表>

2025年12月31日現在

| 科 目（資産の部） | 金 額 | 科 目（負債の部） | 金 額 |
|----------------|--------------------|---------------------|--------------------|
| 流 動 資 産 | | 流 動 負 債 | |
| 現金及び預金 | 125,209,683 | 未払金 | 2,847,289 |
| 立替金 | 360,000 | 未払法人税等 | 170,500 |
| 前払費用 | 8,184,984 | 前受金 | 34,784,600 |
| 未収収益 | 349,000 | 預り金 | 632,007 |
| 仮払金 | 700 | 固 定 負 債 | |
| 固 定 資 産 | | 退職給付引当金 | 6,534,000 |
| 特定資産 学会賞準備金資産 | 8,635,358 | 負 債 合 計 | 44,968,396 |
| | | （正味財産の部） | |
| | | 一般正味財産 | 89,135,971 |
| | | 指定正味財産（うち特定資産への充当額） | 8,635,358 |
| | | 正 味 財 産 合 計 | 97,771,329 |
| 資 産 合 計 | 142,739,725 | 負 債・純資産合計 | 142,739,725 |

第3号議案 2026年度予算承認に関する件

次期（自2026年1月1日至同年12月31日）における予算案について満場異議なくこれを承認可決した。

<一般会計>

| 収入の部 | | | 支出の部 | | |
|-------------|--------------------|--------------------|------------------|--------------------|--------------------|
| 費目 | 25決算 | 26予算 | 費目 | 25決算 | 26予算 |
| 年会費 | | | 会誌発行費 | | |
| 会員（一般） | 25,531,500 | 25,000,000 | ER・PE・PSB | 7,200,000 | 7,201,900 |
| 正会員（学生） | 5,637,800 | 5,600,000 | 生態誌 | 2,524,731 | 2,000,000 |
| 賛助会員 | 538,000 | 500,000 | 保全誌 | 3,540,644 | 2,500,000 |
| 小計 | 31,707,300 | 31,100,000 | 会誌発送費用 | 491,087 | 500,000 |
| | | | 英文誌Open Access経費 | 7,662,364 | 10,000,000 |
| 科研費（OA支援） | 10,900,000 | 9,800,000 | 英文誌編集費 | 1,423,537 | 1,500,000 |
| 学会誌（和文誌）売上げ | 648,500 | 500,000 | 和文誌編集費 | 616,956 | 600,000 |
| 英文誌ロイヤルティ | 10,706,558 | 10,000,000 | 小計 | 23,459,319 | 24,301,900 |
| 出版印税 | 511,089 | 500,000 | | | |
| 論文掲載料 | 1,291,200 | 1,000,000 | 会議費 | 98,214 | 200,000 |
| 広告代 | 0 | 0 | 旅費・交通費 | 1,107,653 | 1,300,000 |
| 著作権使用料 | 138,219 | 130,000 | 人件費 | 21,716,584 | 26,000,000 |
| 大会収入 | 26,069,000 | 31,000,000 | 地区会活動費 | 2,129,335 | 2,170,154 |
| 寄附金 | 0 | 0 | 大会支出 | 28,189,659 | 31,000,000 |
| その他 | 67,249 | 50,000 | 個体群生態学会出版企画費 | 350,000 | 350,000 |
| EAFES東京参加費 | 14,534,000 | — | INTECOL会費 | 0 | 300,000 |
| 前年度繰越金 | 94,835,460 | 89,135,971 | | | |
| | | | 事務費 | | |
| | | | 通信費 | 168,733 | 200,000 |
| | | | 消耗品費 | 301,200 | 300,000 |
| | | | 雑費 | 318,746 | 300,000 |
| | | | 決済代行手数料 | 932,252 | 1,000,000 |
| | | | サーバ関連費 | 199,075 | 1,000,000 |
| | | | 事務所維持費 | 1,680,000 | 1,680,000 |
| | | | 小計 | 3,600,006 | 4,480,000 |
| | | | | | |
| | | | 各種委員会費 | 1,151,826 | 1,200,000 |
| | | | 広報費 | 1,444,337 | 1,500,000 |
| | | | 選挙費 | 365,975 | 0 |
| | | | EAFES費用 | 13,419,376 | 200,000 |
| | | | 講習会費 | 20,000 | — |
| | | | 会員管理委託費 | 5,049,820 | 5,100,000 |
| | | | 法人税 | 170,500 | 200,000 |
| | | | 次年度繰越金 | 89,135,971 | 74,913,917 |
| 合計 | 191,408,575 | 173,215,971 | 合計 | 191,408,575 | 173,215,971 |
| 単年度収入 | 96,573,115 | 84,080,000 | 単年度支出 | 102,272,604 | 98,302,054 |
| | | | 単年度収入-支出 | -5,699,489 | -14,222,054 |

<特別会計>

学会賞準備金（宮地・大島・鈴木賞・自然史研究振興賞）

| 収入の部 | | | 支出の部 | | |
|---------------|------------------|------------------|-----------|------------------|------------------|
| | 25 決算 | 26 予算 | | 25 予算 | 25 決算 |
| 前年度繰越金 | 9,074,934 | 8,635,358 | 賞金 | | |
| 寄附金（自然史研究振興賞） | 200,000 | 200,000 | 宮地賞 | 300,000 | 300,000 |
| 預金利息 | 10,424 | 0 | 大島賞 | 0 | 100,000 |
| | | | 鈴木賞 | 150,000 | 250,000 |
| | | | 自然史研究振興賞 | 200,000 | 200,000 |
| | | | 小計 | 650,000 | 850,000 |
| | | | 雑費 | 0 | 0 |
| | | | 次年度繰越金 | 8,635,358 | 7,985,358 |
| 合計 | 9,285,358 | 8,835,358 | 合計 | 9,285,358 | 8,835,358 |

II. 第73回日本生態学会大会の記録

第73回日本生態学会大会は京都大学吉田キャンパス吉田南構内および国立京都国際会館にて2026年3月11日～3月15日に開催されました。

大会期間中に公開講演会、シンポジウム29、自由集会37、フォーラム7、一般講演(口頭発表)296、一般講演(ポスター発表)1013、ジュニアポスター129、ジュニア生態学講座が行われました。参加者は3272名でした。5日間の日程とポスター賞・ジュニアポスター賞受賞者は以下の通りです。

日程

- 3月11日 一般講演(口頭発表)、代議員会
- 3月12日 シンポジウム、自由集会、一般講演(口頭発表)
- 3月13日 シンポジウム、自由集会、フォーラム、一般講演(口頭発表)
- 3月14日 総会、授賞式、受賞記念講演、フォーラム、一般講演(ポスター発表)、ミキサー
- 3月15日 公開講演会、シンポジウム、フォーラム、一般講演(ポスター発表)、ジュニアポスター発表、ジュニア生態学講座

ポスター賞受賞者

<外来種/Introduced species>

【最優秀賞】

「穀物輸入に伴う雑草種子の海を越えた大移動：外来系統シロザは日本に侵入しているか？」田中伸一（京都大学）、松橋彩衣子（農研機構）、下野嘉子（京都大学）

【優秀賞】

「外来カエル類の侵入時間軸に沿った食性変化と在来カエル

類への影響」細谷祐太（筑波大学・院・理工）、澤田聖人（筑波大学・高等研）、小畑理桜（筑波大学・生物）、人見美保、馬籠優輔（筑波大学・院・理工）、門脇正史（茨城県つくば市）、上條隆志（筑波大学・生命環境系）

「キョンはどこまで増える？：自動撮影カメラを用いた個体群増加率の密度依存性の検証」松本望美（東京大学）、中島啓裕（日本大学）、亘悠哉（森林総研、東京大学）

<菌類・微生物/Fungi and microbes>

【最優秀賞】

「食糞性昆虫の外生菌根菌胞子運搬者としての生態的機能の解明」西田拓翔、安田彩人、石若直人（近畿大院・農）、平岩将良、澤島拓夫、早坂大亮（近畿大学・農）

【優秀賞】

「植物-土壌フィードバックを駆動するミヤコグサの根粒菌への選好性の定量」太田千晴（東京大学）、番場大（静岡大学）、佐藤修正（東北大学）、土松隆志（東京大学）

「枯れ木のマイホームはカビだらけ？—ハナカミキリと共生酵母が変える真菌群集」宮下明里、土岐和多瑠（名古屋大・院・生命農）

<群落・遷移・更新/Plant community, succession and regeneration>

【最優秀賞】

「温暖化と樹木分布のミスマッチは一次生産性を低下させるか？」大同唯和、紺頼楓、小野田雄介、辰巳晋一（京都大学）

【優秀賞】

「草本植物群の機能形質は種を越えて都市で収斂するか？」野村康太（北海道大学環境科学院）、内海俊介（北海道大学地環研）

「形質は種間のニッチの違いを説明するか：草本競争実験に

よるアプローチ」土居健央（京都大学）、篠原直登（沖縄科学技術大）、山尾僚（京都大学）

<景観/Landscape ecology>

【最優秀賞】

「世界農業遺産『大崎耕土』の景観が促進する水田におけるクモ類の害虫被害防除効果」上野陽心（中央大学）、三宅源行（大崎市役所）、船橋玲二（NPO 田んぼ）、中島一豪、高田まゆら（中央大学）

【優秀賞】

「How synchronized are migratory birds with vegetation green-up?」Yi SHEN, Jamie MKASS (Tohoku Univ.)

<行動/Behavior>

【最優秀賞】

「ハムシ科における捕食防御形質の獲得は交尾戦略の進化をもたらしたか?」仲江川大夢、池田紘士（東京大学）

【優秀賞】

「沖縄島北部において腐肉食動物による死体除去がロードキルモニタリングに与える影響」丸田裕介、下地博之、鶴井香織、辻和希（琉球大学）

「マダガスカル熱帯乾燥林におけるコクレルシファカの採食戦略の季節変化」佐川そのみ、佐藤宏樹（京都大学）

「イトヨ雌雄の縄張り性における相関集団分化の脳トランスクリプトーム基盤」上野若菜（九州大学）、山崎遥（名古屋大学）、森誠一（岐阜協立大学）、細木拓也（北海道大学）、小北智之（九州大学）

「三宅島の在来スカベンジャー種による、有毒外来ヒキガエルのロードキル利用」古賀柊成、馬籠優輔、小畑理桜、飯島大智、上條隆志、澤田聖人（筑波大学）

<動物個体群/Animal population>

【最優秀賞】

「イルカの胸ビレの部分的欠損が流体力に及ぼす影響」三岡夏美（東京農業大学）、岡村太路（名古屋大学）、西村双葉（神奈川県博）、菊地デイル万次郎（東京農業大学）

【優秀賞】

「捕食圧と巢の資源量が貝住み協同繁殖シクリッドの社会複雑性に与える影響」Yuuki YOSHIO (Kyoto Univ.)、井上諒一、日高諒（大阪公立大学）、佐藤駿（京都大学）

「オリエントオコウモリの餌探索における視覚と嗅覚の役割」花見銀河（琉球大学）、中村智映、山内悦子、松野仁胡、島田晴加、吉見裕子、築場未来（沖縄こどもの国）、金城輝雄（琉球野生動物救護 CC）、金尾由恵（沖縄こどもの国）、小林峻（琉球大学）

「高頻度環境 DNA 観測で明らかにする魚類の個体群動態とその環境応答」Keisuke OTA (Tohoku Univ.)、Shota SUZUKI、

Takuzo ABE (Minamisanriku Nature Center)、Akihiro DAZAI (Center for Sustainable Society)、Gen IWASHITA、Gohki KASAHARA、Hiroto OIKAWA、Kouhei OHMURO、Mayu SUZUKI (Tohoku Univ.)、Minoru KASADA (Hokkaido Univ.)、Naoma MOTOMATSU (Tohoku Univ.)、Syogo KOBAYASHI (Center for Sustainable Society)、Tatsuya MIYAMOTO、Akifumi S、ANABE (Tohoku Univ.)、Michio KONDOH (Tohoku Univ. WPI-AIMEC)

「島嶼におけるニホンアマガエルの大型化は種間競争からの解放によって生じたか?」今中龍平、森井椋太、安田晶南、秀健吾、池田紘士（東京大学）

<進化・数理/Evolution and mathematical ecology>

【最優秀賞】

「ホトケドジョウの房総丘陵河川最上流部の環境への局所適応」宮城知広（千葉大・院・融）、村上正志（千葉大・院・理）

【優秀賞】

「流水環境適応を経た海面進出：アメンボ類における進化過程の推定」朝鍋遥、土畑重人（東京大学）

「知床半島のオシヨロコマにおける浸透性交雑が個体レベルの適応度に及ぼす影響」福澤航生（東京大学）、山本祥一郎、佐橋玄記（水産研究・教育機構）、野別貴博（知床財団）、安樂健太、森田健太郎（東京大学）

「スズメガ科幼虫はなぜ尾角を持つのか?」爲則咲百合、今田弓女（京都大学）

「気候変動に伴う集団動態とニューカレドニア産 *Oxera* 属の適応放散」坂野慧悟、池田隆介、河合良弥、伊藤僚祐（京都大学）、野口英樹、寺内真（ROIS-DS）、豊田敦（国立遺伝学研究所）、Gildas GÂTEBLÉ (INRAE)、陶山佳久（東北大学）、井鷲裕司（京都大学）

<動物群集/Animal community>

【最優秀賞】

「成長する餌種に対する小さな捕食者種の非消費型効果：餌種のサイズ構造に注目して」漆原理心、高津邦夫（新潟大学）

【優秀賞】

「受動音響モニタリングを用いた陸生渡り鳥における群島内移動パターンの解明」船橋美月、谷口司、飯島大智、上條隆志（筑波大学）

「温暖化進行下の体サイズ変化メカニズム：飼育実験と千超標本の野外パターンから迫る」古澤惇平（北海道大学）、丹羽慈（自然環境研究センター）、日浦勉（東京大学）、内海俊介（北海道大学）

「セミ類の活動時間変化がもたらす音環境の変化と鳴き声コミュニケーションへの影響」盛拓貴、大澤剛士（東京都立大

学)

「環境か競争か?: トンボ群集集合プロセスの局所スケール解析」松田隆之介、辰巳晋一、松岡俊将、山崎理正 (京都大学)

<動物繁殖・生活史 / Animal reproduction and life history>

【最優秀賞】

「異なる捕食者に応じて機能する二次防衛: オジロアシナガゾウムシの防衛戦略」角うらん、杉浦真治 (神戸大学)

【優秀賞】

「トカゲの赤さは強さのあかし: オスに特異的な色彩形質と闘争能力の定量評価」柳原諒太郎、城野哲平 (京都大学)

「マダニは『誰』の匂いに惹かれるのか: 複数の宿主動物種の臭気を用いた選好性の比較」河野啓太 (東京農工大学大学院)、土井寛大 (森林総合研究所)、藤岡紘、野村星矢 (井の頭自然文化園)、小山哲史、佐藤俊幸 (東京農工大学大学院)

「非繁殖期の行動は繁殖成績に影響するか?: 鳥類を対象とした野外実証研究」惣田彩可 (京都大学)

「サクラムスの体サイズ依存的な降海遅延」卯城光 (北海道大学)、菅野陽一郎 (コロラド州立大学)、二村凌 (日本学術振興会、国立水産技術研究所、ライブニッツ淡水研)、鬼石論志、奥田篤志、岸田治 (北海道大学)

<動物と植物の相互関係 / Animal-plant interaction>

【最優秀賞】

「果実を食べるトカゲの特異な役割: 開けた環境への指向性種子散布の可能性」福山亮部、大河龍之介 (京都大学)、田金秀一郎 (鹿児島大学)、野依航、伊與田翔太 (京都大学)、Ny Tiavina RAKOTOARIZAFY (Univ. Antananarivo)、佐藤宏樹 (京都大学)

【優秀賞】

「カザリショウジョウバエの訪花を支える学習能力と脳構造」川村康平、桂宗広、石川由希 (名古屋大学)

「ヒグマの広葉樹液果類 4 種の種子散布パターン: 採食イベント単位の距離・方位・標高移動」牛来麗奈、根本唯 (東京農業大学)、坪田敏男、下鶴倫人 (北海道大学)、山中正実、中西将尚 (公益財団法人知床財団)、山崎晃司 (東京農業大学)

「ヨウクランの送粉者であるサビタマバエの産卵行動とサビ病菌との関係性の解明」砂川勇太 (東大・理・生物)、望月昂、川北篤 (東大・理・植物園)

「ホタルカズラ(ムラサキ科)の花弁の蛍光が送粉者誘引に与える効果の解明」西澤空、望月昂、川北篤 (東京大学)

<植物個体群・生活史・繁殖 / Plant population, life history, and reproduction>

【最優秀賞】

「イネ科 10 種を用いた種子重量が実生の生残と物質分配におよぼす影響の比較」遠藤宇称、鈴木準一郎 (東京都立大学大

学院)

【優秀賞】

「オモダカの地理的分化と繁殖特性: 除草剤抵抗性の進化パターンが異なる東西群の比較」宮井駿 (京都大学)、一箭翼 (京都府農林センター)、岩上哲史 (東京農工大学)、内野彰 (農研機構)、富永達、下野嘉子 (京都大学)

「動物付着散布型植物は背丈が低いのか: キク科の種子散布様式と植物高の相関進化の検証」本吉亮介、山尾僚 (京都大学)

「日本の地域固有植物はどう多様化したか: 落葉広葉樹林に生育する 2 種群の系統地理解析」高橋弥生 (お茶の水女子大学)、藤原正人 (兵庫県立小野高校)、尾関雅章 (長野県環境保全研究所)、Su-Kil JANG (Gangneung-Wonju National Univ.)、田金秀一郎 (鹿児島大学総合博)、岩崎貴也 (お茶の水女子大学)

<植物生理生態 / Plant ecophysiology>

【最優秀賞】

「部分的菌従属栄養性の着生ランは存在するのか: 安定同位体分析による検証」藤井健太 (神戸大学)、陀安一郎 (総合地球環境学研究所)、末次健司 (神戸大学)

【優秀賞】

「マダガスカル熱帯乾燥林における木本性つる植物の樹皮形質と水利用戦略の関連」岡本鮎樹 (京都大学)、藤本悠太郎 (森林総研)、黒川紘子、北島薫 (京都大学)

「日本産樹木における葉形態と気候要因との対応関係 — 種間・種内変異の視点から —」紺頼楓、伊藤僚祐、砂山星也、大村栗太、井鷲裕司、北島薫、辰巳晋一、小野田雄介 (京都大学)

「Plant Responses to Temperature Along Japan's Latitudinal Gradient: A Reciprocal Transplant Experiment」Xin WANG (Kyoto University)、Haruhiko TANEDA (University of Tokyo)、Masahiro NAKAMURA (Hokkaido University)、Hideki SUGIURA、yusuke ONODA (Kyoto University)

「常緑樹および落葉樹における光合成と葉肉コンダクタンスの緯度間比較」須原健仁 (京大・森林生態)、砂山星也 (京大・熱林)、小野田雄介 (京大・森林生態)

<物質循環 / Material cycling>

【最優秀賞】

「ボルネオ熱帯林における葉リター・土壌の C:N:P 化学量論: 土壌リン傾度に伴う変化」平田萌根、水上知佳、小嶋慧 (京都大学)、今井伸夫 (東京農業大学)、竹重龍一 (大阪公立大学、国立環境研究所)、北山兼弘、渡邊哲弘 (京都大学)、相場慎一郎 (北海道大学)、小野田雄介 (京都大学)、Rolando Bin ROBERT、Sandy Tsen Tze LUI、Nilus REUBEN (FRC

Sabah)、Justine Terrence VANIELIE (Sabah Parks)、青柳 亮太 (京都大学)

【優秀賞】

「環境変化が二枚貝共在菌の担う硫黄循環を変える～個体内変化が外環境に及ぼす影響～」中川潤紀、猪股寛大 (佐賀大院・農)、折田亮 (佐賀大・農)

「常緑性・落葉性ブナ科樹木の細根滲出物と土壌リン・窒素可給性の季節変動」小嶋慧、水上知佳、小野田雄介 (京大・森林生態)、青柳亮太 (京大・森林生態、京都大学白眉センター)

<生態系管理・生態学教育・普及 / Ecosystem management and education and popularization of ecology>

【最優秀賞】

「中型哺乳類における侵入防止柵の Fence gap 利用と利用選択に与える影響」中山小夏、森本淳子 (北海道大学)

【優秀賞】

「ALS 点群由来の森林構造指標を用いた斜面崩壊防止機能の評価」橋本夏果 (京府大生命環境)、中田康隆、長島啓子 (京府大院生命)

「東京都部に点在する神社仏閣の小規模水域が秘めるトンボ幼虫の維持機構の解明」根津貴行、齊藤那美、中島一豪、高田まゆら (中央大学)

「シカ侵入最初期における植生変化の定量的分析—指定管理捕獲実施地域の多点調査から」日野まほろ、鈴木牧 (東京大学)

「植生保護柵において生物多様性を規定する要因は何か？複数分類群の群集構造を比較して」安田和真、小堀原 (東京農工大学)、谷脇徹 (神奈川県自然環境保セ)、小池伸介 (東京農工大学)

<生物多様性 / Biodiversity>

【最優秀賞】

「隠岐島後におけるモグラ2種の共存機構」山澤泰、横畑泰志 (富山大学)

【優秀賞】

「dpMIG-seq 法によるミヤマシジミの東アジア集団の分子系統と国内の集団構造の解明」高野晋平 (富山大学)、大脇淳 (桜美林大学)、中濱直之 (兵庫県立大学)、速水将人 (北海道立総合研究機構)、CHOI Sei-Woong (Mokpo National University)、KIM Sung-Soo (Research Institute for EAEB)、CHISTYAKOV Yuri (Russian Academy of Science)、出戸秀典 (ミヤマシジミりの会)、宮下直 (東京大学)、朝日純一 (東京都)、木下豪太 (富山大学)

「アマビコヤスデ属における種内形態地理的変異と種の分布パターン」林田美里、池田唯人、船津実結子、大城翔 (熊本

大学)、Zoltán KORSÓS (Hung. Nat. Hist. Mus.)、鶴崎展巨 (鳥取大学)、田辺力 (熊本大学)

「クロネハイイロヒメハマキは広食者か？寄主の異なる集団間での遺伝的分化」川島育海、屋宜禎央 (九州大学)

<保全 / Conservation>

【最優秀賞】

「西表島と石垣島のカンムリワシの個体群動態：小島嶼での持続的生存は可能か？」戸部有紗、佐藤悠 (京都大学)、近藤充希 (鹿児島大学)、鍋島圭 (国立環境研究所)、Nian-Hong JANG-LIAW (Taipei Zoo)、大沼学 (国立環境研究所)、村山美穂 (京都大学)

【優秀賞】

「シカ食害からのレフェュージャとしての巨樹の定量的評価」石寄史士 (神戸大学)、阪口翔太 (京都大学)、駒田夏生 (広島大学)、高柳敦、山崎理正 (京都大学)、藤木大介 (兵庫県立大学)、井上みづき (日本大学)、福島慶太郎 (福島大学)、高橋大樹 (九州大学)、長澤耕樹 (農研機構)、増田和俊 (東京大学)、石井弘明 (神戸大学)、石原正恵 (京都大学)、東若菜 (神戸大学)

「夜間人工光による昼行性キリギリスの発音行動の変化と生存率への影響」中岡佳祐、広部康太、清水孟彦、門田直輝、先崎理之 (北海道大学)

「4 地域の天然記念物群落を含む希少種ツルマンリョウの比較遺伝解析」片山花菜、遠藤千晴 (京都大学)、樽澤優芽子 (総合研究大学院大学)、坂野慧悟、高谷智響、井鷲裕司 (京都大学)

「種分布モデルを用いた絶滅危惧種イワテヤマナシの分布特性の解明」藤田志保、石井弘明 (神戸大院・農)

「耕作放棄がセトウチサンショウウオを脅かす-生息への影響と保全管理の提案-」松本奈々 (神戸大学)、坂田雅之 (北海道大学)、國政祐太、山本優奈、源利文 (神戸大学)

<ジュニアポスター>

【最優秀賞】

「スズキ(Lateolabrax japonicus)の捕食行動に右利き・左利きは存在するのか」*森川貴弘、児島碧斗、今井怜美 (飾磨高等学校生物部)

「ネズミザメ科における生態と尾鰭・胸鰭の発達との関係」

*吉澤慶、森爽太、小山悠太 (浅野中学・高等学校)

「岐阜のオオサンショウウオを守る！2～国産個体の生息地を交雑個体から取戻すために～」*安藤芽唯、高橋志帆、小林那奈美、佐藤剛駈、吉田みのり、伊藤那緒、河合七香、粟井佑果、安藤有未、田中隆太郎、藤井飛燕、志田和樹、高木雅紀 (大垣北高等学校)

「アゲハチョウ属幼虫の腹脚形態とその生息環境の関係」
 *鷲山慶樹（静岡サレジオ高等学校）、後藤寛貴（静岡大学）

「ササゴイの幼鳥は流速を考慮せずに Bait-fishing を行う」
 *杉水蒼空、矢野湊大、内田雄太、中西順平、池田和佳、田中由羽衣、渡邊美友（熊本中央高・生物探究）、岡本浩太郎（熊本中央高校）

「共生菌がグリーンヒドラ(Hydra viridissima)の再生能に与える影響」*中島成海、津田真悠、大川原史也（嵯峨野高等学校）、稲田圭（京都大学大学院）

「植食動物の行動研究から決定する人工藻場礁の新たなかたち」*芦谷朋樹（東海大付属望星高校）

【優秀賞】

「ネビキグサの有性生殖が制限される謎の解明 II」*Rico KAWABATA, Yui KASAJIMA, Soma IWAMOTO, Yuzuki KAI, Kotoha KIMURA, Keita KODAMA, Koki TAKAO, Ryota TANIGUCHI, Naoki HAYASI, Taiga FUJII（Akashikita Senior High School）

「オジギソウの刺激識別と学習能力: 刺激装置と AI 葉開閉度評価を用いた実証」*小松和滉（諏訪清陵高等学校）

「バイオチャーの施用条件の差異が植物の生理活性に与える影響と砂漠化緩和策への応用」*澤田尚樹、高橋虎嗣、小山悠太（浅野中学・高等学校）

「クワガタムシ幼虫に見られるメス斑とは何か?」*石橋桐磨、石塚太郎、川合麻夢、矢追雄一（静岡県立焼津中央高校）、後藤寛貴、斎藤頼貴（静岡大学）

「アゲハの幼虫期記憶の世代間継承とエピジェネティクスに関する研究」*長井丈（神戸市立井吹東小学校）

「トレイルカメラを用いた樹液場に集まる樹液食昆虫の相互作用の解明」*柴田凌玖、和泉利香、墨野倉伸彦（立教新座高等学校）

「水鳥は同じ向きに揃ってとまるのか? 福岡市大濠公園の杭 81 本での一年間の観察」*佐藤湊太（東明館中学校）

「ムササビ (Petaurista leucogenys) の概日リズムの調節」*藤原悠太、渡邊心葉、岡崎弘幸（中央大附属高校生物部）

「ムササビのエサ資源としての樹葉選択に影響する化学的要因の解析」*児島楨子、岡崎弘幸（中央大附属高校生物部）、品川明（学習院女子大学）

「ヤマナメクジが歩道に出現するパターン～出現頻度と気象条件からみた行動特性～」*藤奏葉美（兵庫県立北摂三田高校）

「水産養殖におけるアルテミア培養の手法: 微細藻類 *Dunaliella salina* の活用」*鬼頭佑成（玉川学園高等部）

「陸ガニは果実採食者? それとも破壊者～圧力とハサミの形状からみた採食方法～」*平塚那菜、琴野遥香、丹羽悠（浜

松学芸高等学校）

「アメリカザリガニはグルメなのか? ～誘引実験から明らかにする駆除効率化～」*阿知波ハル、丸尾泰雅、山内希一、大森奏、関本蒼大、是賀柳之介、寺本龍翔（浜松学芸高等学校）

【審査員特別賞】

「静岡県石津浜海岸における釣り人の動向と釣りゴミの解析」*福安駿生、吉澤諒成、岩崎真大、中村元春、矢追雄一（静岡県立焼津中央高校）、木谷亮太、源利文（神戸大学）

「人間用心電図計を用いたクサガメの非侵襲的心拍数測定一心拍数変動因子の特定」*朝比奈遥杜（附属浜松中学校）

「蚊を誘引する花の構造～送粉者と花の形態進化の関係～」*熊谷緋沙子（九段小学校）

「タンポポの在来種と外来種の局所的混在地における経年的変化」*細見悠真（滝川第二高等学校）

「ユキノシタ植物の蛍光現象とその特性について」*井上楓愛（N 高等学校）

「迫る! ヒメ様の謎ーヒメギスのグルーミング」*森岡玲圭（清心女子高等学校）

「オオゴマダラとその擬態種の翅における背景黄色領域の発現メカニズム」*平山瑛美（沖縄カトリック高校）、尾崎百、末永龍之介、中里優吾、大瀧丈二（琉球大学）

「尾瀬国立公園におけるニホンヤマネの生態調査」*小林礼弥、高橋拓真、藤井佑貴、柳田氣里（尾瀬高等学校）

「長良川におけるアユ仔魚の降下の現状」*Toshiaki NANATSUE, Gaku TAKASU, Sota HIBINO, Ayano SHIBA, Junichiro MIURA（Gifu H.S.）

「藍植物におけるインジカンによる防御機能と植食性昆虫への生理的影響」*雨宮樹里、福島紅華、山口瑞帆（津田サイエンスクラブ）

「ナガミヒナゲシの花型の謎～種分化? 投資戦略?～」*ファウラー姫瑠（明治学園中学高等学校）

「何故アオスジアゲハは成熟葉の上にいるのか?」*野波蒼空、児玉凌汰、長屋光俐、辻内樹（岐阜県立岐阜高等学校）

「ショウリョウバッタの体色変化における視覚刺激の影響とその可逆性」*鈴木俐々（東葛飾高等学校）

III. 代表理事（兼会長）と業務執行理事の選任について

2026年3月14日に2026年度臨時理事会と第1回理事会が行われ代表理事（兼会長）および業務執行理事が選任された。

1. 代表理事（兼会長）（任期2026年3月～2028年3月）
 日浦 勉

2. 業務執行理事（任期：2026年3月～2028年3月）
 佐竹 暁子（副会長、次期会長候補）

久米 篤 (出版担当)
木村 恵 (男女共同参画担当)
塩尻 かおり (将来計画担当)

IV. 寄附一覧

この度は日本生態学会へご支援いただき心から感謝申し上げます。本ご厚意を生態学の進歩・発展・普及を図る活動に寄与したいと存じます。今後とも何卒より一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。※敬称略

2025年(12月)

・株式会社シンク・ネイチャー(「自然史研究振興賞」への寄附金20万円)

V. 書評依頼図書(2025年10月~2026年4月)

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はEメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局(office@esj.ne.jp)までお知らせ下さい。なお、書評は1年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 「野生生物と社会」学会(編)・日本哺乳類学会 日本鳥学会(協)「**野生動物の保全と管理の事典**」(2025) 480pp.朝倉書店 ISBN:978-4-254-18069-5
2. 日本光合成学会編「**植物研究の進め方 原理と実験例**」(2025) 200pp.朝倉書店 ISBN:978-4-254-17202-7
3. 京極大助著「**Excelでひも解く進化のしくみー進化生物学入門ー**」(2025) 180pp.丸善出版 ISBN:978-4-621-31217-9
4. 一般社団法人日本哺乳類学会編「**哺乳類学の百科事典**」(2025) 548pp.丸善出版 ISBN:978-4-621-31196-7
5. 森田健太郎著「**サケマス物語一魚の放流を問いなおす**」(2026) 224pp.ちくま新書 ISBN:978-4-480-07720-2
6. 真野佳博・木岡紀幸編著「**ポイントがわかる分子生物学第3版**」(2025) 194pp.丸善出版 ISBN:978-4-621-31203-2
7. B.ガステル・R.A.デイ著 美宅成樹訳「**世界に通じる科学英語論文の書き方 原書9版**」(2026) 430pp.丸善出版 ISBN:978-4-621-31260-5
8. カートD.ファウシュ著 東知憲訳「**エッセンス・オブ・リバーズ 川を愛する科学者の発見の旅**」(2025) 336pp. A&FBOOKS ISBN:978-4-909355-51-5
9. 日本環境毒性学会編「**環境毒性学**」(2026) 384pp.丸善出版 ISBN:978-4-621-31232-2
10. 道上達男・阿部光知・末次憲之・坪井貴司編「**ノーベル賞論文に見る生命科学の思考法**」(2026) 226pp.丸

善出版 ISBN:978-4-621-31269-8

11. ハンナ・ルイス著 藤原一繪監訳 浦田未央訳「**ミニフォレスト革命 最速で世界に森を再生している宮脇方式**」(2026) 200pp.丸善出版 ISBN:978-4-621-31281-0
12. 広中平祐編集委員会代表「**第2版 現代数理科学事典(分冊普及版) 第2巻 生命の数理**」(2026) 188pp.丸善出版 ISBN:978-4-621-31253-7
13. 日本昆虫科学連合編「**昆虫科学の最前線**」(2026) 488pp.丸善出版 ISBN:978-4-621-31265-0
14. 三上修著「**古文鳥類学 平安貴族が愛でたのは本当にホトトギスなのか**」(2026) 142pp.岩波書店 ISBN:978-4-00-029743-1

VI. 寄贈図書

1. 「公益財団法人内藤記念科学振興財団 内藤財団時報 第117号」(2026) 171pp.公益財団法人内藤記念科学振興財団

書評

ダニエル・L・ハートル著 藤本明洋+館田英典訳「**集団遺伝学・集団ゲノム学入門 原書第4版**」(2025) 352pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060248-8 定価8,250円

今から約15年前の高校生だった頃、生物IかIIの教科書で、メンデルの法則を学んだのが遺伝学という学問に触れた最初だったかと思う。大学受験にむけて勉強する中で、遺伝に関わる問題がとても難しく感じ、なんとなく苦手意識を持ったことも覚えている。その後、理科の教職免許を取るために5年ごしに開いた高校生物の図説を見て驚いた。たった5年の間に遺伝に関するページ数も記載量も自身が学んだ頃より格段に増えていたからだ。そしてその時から10年後の今、自分の興味のある植物種について次世代シーケンサーを用いた研究を実際にすることになるとは思いもよらなかった。第一章の冒頭で、著書の博士課程のメンターがデオキシリボ核酸(DNA)の配列決定の実現は遠い将来になるだろうと考えていたように、恐れ多くも、ここまで集団遺伝学が身近なものになるとは思わなかったのが正直な感想である。門外漢である私のような人にとって、集団遺伝学を網羅的に学ぼうとすると本書の原著であるA Primer of Population Genetics and Genomics 4th ed.が教科書的な扱いになるが、いかんせん洋書のため、どうしても読むのに時間がかかる。そのため、和書として出版されることを知り、再度勉強し直すつもりで手に取らせていただいた。

本書は第1章から第9章までで構成されており、第1章から

第6章までは遺伝的多様性、近親交配と集団構造、突然変異、自然選択や遺伝的浮動など遺伝学の根幹となるトピックについて扱い、第7章から第9章までで集団遺伝学に絞ってさらに詳しく解説されている。また、どの章の最後にも問題とその回答が付されており、独学で学ぶ人にも優しい構成となっている。

第1章の遺伝的多様性では遺伝学と分子生物学の基礎として、遺伝学と表現型および遺伝子発言に関する用語の解説に始まり、主なDNA多型の紹介をしている。加えて、アレル頻度と遺伝子頻度の計算方法についても具体例の計算式とともに記載があるため、理解がしやすい。また、集団遺伝学で最もよく使用される数理モデルの解説もしている。第2章の遺伝的多様性の構成ではハーディ・ワインバークの法則を中心に話が進む。特にハーディ・ワインバーク平衡のカイ2乗検定では第1章でも登場した具体例を再度取り上げ、計算式とともに観測値、期待値、自由度について解説している。また、複数の遺伝子に関わる事象として、連鎖と連鎖不平衡をあげており、ある強く連鎖している2つのSNPを例にあげ、配偶子頻度の推定値、各SNPのアレル頻度の推定値をわかりやすく解説している。第4章では突然変異等について取り上げており、不可逆突然変異と可逆突然変異の違いに関する解説やヒト集団で見られる唾液中のアミラーゼをコードする遺伝子のコピー数多型を例にあげ、遺伝子重複と機能分化について解説している。加えて、固定指数が集団構造があることによって距離とともに増加していくことをしばしば距離による隔離とよび、これに関わる式をある論文のデータとともに例示しており、大変わかりやすい。第7章では分子集団遺伝学について簡潔に説明しており、塩基置換率にはじまり、Tajima's DやFay and Wu's Hについても合祖系統樹の図も含めて解説されている。また、多型と種間変異についてはマクドナルト・クライマンテストやハドソン・クライマン・アグエデテストについて詳細に記載がある。第9章の自然集団における複雑形質では複雑形質に影響する遺伝子の探索において量的形質座位(QTL)の解説があり、F2世代におけるQTLの遺伝型頻度と連鎖している原因座位による表現型の連鎖の表は理解がしやすい。加えて、近年多くの種で研究が進むゲノムワイド関連研究等についても簡単に解説されている。

以上から、本書は基礎的な用語や式の辞書として役立ち、また最新の研究事例についても学ぶことができることから、本書は特にこれから集団遺伝学に関わる解析を行う大学、大学院生、さらにはこれから遺伝学に関する業務をする予定のある社会人におすすめできると思われる。ぜひ手に取って実際に中身を確認してみしてほしい。

(土木研究所流域水環境グループ 梶ちがや)

一般社団法人日本生態学会
役員・代議員・委員一覧

代表理事（会長） 日浦 勉 2026.3~2028.3

業務執行理事

（副会長・次期会長候補）

佐竹 暁子 2026.3~2028.3

（専務理事） 内海 俊介 2025.3~2027.3

（庶務担当） 半場 祐子 2025.3~2027.3

（会計担当） 山尾 僚 2025.3~2027.3

（出版担当） 久米 篤 2026.3~2028.3

（男女共同参画） 木村 恵 2026.3~2028.3

（情報/INTECOL） 塩尻 かおり 2026.3~2028.3

理事（2026.3~2028.3）

赤坂 宗光 瀧本 岳

土居 秀幸 富松 裕

西廣 淳 保坂 哲朗

村岡 裕由 吉田 丈人

小林 真 森 章

監事 立田 晴記 2025.3~2027.3

木庭 啓介 2026.3~2028.3

代議員（2025.12~2027.12）

全国代議員 赤坂 宗光 石濱 史子

丑丸 敦史 内海 俊介

大澤 剛士 鏡味 麻衣子

黒川 紘子 近藤 倫生

佐藤 拓哉 瀧本 岳

土居 秀幸 東樹 宏和

西廣 淳 村岡 裕由

吉田 丈人

地区代議員 小泉 逸郎（北海道） 富松 裕（東北）

佐々木 雄大（関東） 日室 千尋（中部）

山尾 僚（近畿） 保坂 哲朗（中国・四国）

細川 貴弘（九州）

Ecological Research 編集委員会

Editor-in-Chief 兵藤 不二夫

Deputy Editor-in-Chief 村上 正志

Associate Editors-in-Chief

藤井 佐織 今井 伸夫

井上 智美 石川 尚人

Bo Li 松崎 慎一郎

大澤 剛士 大園 享司

瀧本 岳
角田 裕志

津田 吉晃
横溝 裕行

Handling Editors

馬場 友希 Yunting Fang

藤木 大介 深澤 圭太

福井 大 福島 慶太郎

Rebecca Gladstone-Gallagher

Jingyun Fang Yunting Fang

半場 祐子 平田 竜一

日浦 勉 市栄 智明

井田 崇 飯田 碧

稲垣 善之 David W.Inouye

Veronika Jilková 壁谷 大輔

兼子 伸吾 片山 歩美

片山 昇 加藤 知道

北村 俊平 小林 和也

工藤 洋 松井 一彰

松岡 俊将 中村 誠宏

仲澤 剛史 Tsewang Namgail

Pil Sun Park Serena Rasconi

Samuel R. P. -J. Ross 坂田 ゆず

佐々木 雄大 佐藤 拓哉

Stephen D. Sebestyen 設楽 拓人

Bo Song Lijuan Sun

Janne Sundell 鈴木 紀之

鈴木 智之 高田 まゆら

高田 宜武 高木 俊

高巢 裕之 Cindy Q.Tang

寺本 宗正 槻木 玲美

内井 喜美子 Jihua Wu

安田 仁奈

日本生態学会誌編集委員会（2026.1~2028.12）

編集委員長 竹内 やよい

編集幹事 相場 慎一郎

都野 展子 松林 圭

編集委員 永濱 藍 才木 真太郎

鈴木 節子 入江 貴博

箱山 洋 村上 貴弘

東樹 宏和 坂田 ゆず

佐久間 大輔 保原 達

笠原 玉青 池上 真木彦

永光 輝義 立木 佑弥

山浦 悠一 鈴木 重雄
嶺田 拓也 富田 涼都
白川 勝信

常田 邦彦 : 鳥獣管理
矢原 徹一 : 海外渉外
安溪 遊地 : エネルギー問題
露崎 史朗 : 湿地
水谷 瑞希 : MAB

保全生態学研究編集委員会 (2024.1~2026.12)

編集委員長 大澤 剛士
編集幹事 丑丸 敦史 小池 文人
宮崎 佑介
編集委員 天野 達也 赤坂 宗光
石濱 史子 市野川 桃子
岩井 紀子 大澤 隆文
片山 直樹 角谷 拓
河口 洋一 岸本 康誉
北村 亘 楠本 良延
久保 雄広 小池 伸介
五箇 公一 小山 明日香
今藤 夏子 佐伯 いく代
佐々木 雄大 曾我 昌史
高田 まゆら 立原 一憲
露崎 史朗 東城 幸治
戸田 光彦 中濱 直之
根岸 淳二郎 松崎 慎一郎
宮下 彩菜 森田 健太郎
山浦 悠一 横溝 裕行

村上 興正 : 環境行政 (外来種)
若松 伸彦 : 環境政策 (自然公園)
神山 智美 : 環境法
Peterson Miles Isao : 国際化

将来計画専門委員会 (2026.4~2028.3)

委員長 小泉 逸郎
委員 巖佐 庸 石井 励一郎
佐竹 暁子 三木 健
北島 薫 塩尻 かおり
彦坂 幸毅 黒川 紘子
土居 秀幸 山道 真人
佐藤 拓哉 石川 麻乃
大竹 裕里恵 藤岡 春菜
矢原 徹一 鏡味 麻衣子
宇野 裕美 Jasmie Kass
京極 大助

自然保護専門委員会 (2026.4~2028.3)

委員長 関島 恒夫 : 再生可能エネルギーと環境影響評価
副委員長 和田 直也 : 気候変動と生態系モニタリング
幹事 大久保 奈弥 : 海洋 高嶋 敦史 (九州)

地区選出委員

北海道 : 照井 滋晴 鈴木 智之
早矢仕 有子
東北 : 高橋 雅雄 黒沢 高秀
関東 : 亘 悠哉 奥山 雄大
中部 : 郡 麻里 増田 理子
近畿 : 中井 克樹 古賀 庸憲
中国・四国 : 岡 浩平 比嘉 基紀
九州 : 大庭 伸也 平田 令子

専門別委員 増沢 武弘 : 高山・亜高山
竹門 康弘 : 陸水
伊谷 行 : 海洋
久保田 康裕 : 熱帯・亜熱帯
横畑 泰志 : 寄生生物
阿部 晴恵 : 遺伝子

生態学教育専門委員会 (2026.4~2028.3)

委員長 平山 大輔
副委員長 宮田 理恵
非教育学部系 畑田 彩 中田 兼介
深野 祐也
教育学部系 丑丸 敦史 三宅 崇
中井 咲織 佐賀 達矢
高校教員 矢追 雄一 藤井 新次郎
博物館 澤邊 (中村) 久美子 小林 誠

大規模長期生態学専門委員会 (2026.4~2028.3)

委員長 中村 誠宏
委員 石原 正恵 伊東 明
内海 俊介 黒川 紘子
木庭 啓介 村岡 裕由
中野 伸一 大手 信人
斎藤 琢

生態系管理専門委員会 (2026.4~2028.3)

| | | |
|------|-------|--------|
| 委員長 | 西田 貴明 | |
| 副委員長 | 西廣 淳 | |
| 幹事 | 高川 晋一 | 伊藤 浩二 |
| 委員 | 赤石 大輔 | 上野 裕介 |
| | 大澤 隆文 | 大野 ゆかり |
| | 大脇 淳 | 小笠原 奨悟 |
| | 鎌田 磨人 | 佐々木 章晴 |
| | 白川 勝信 | 古田 尚也 |
| | 松田 裕之 | 山下 慎吾 |
| | 矢原 徹一 | 吉田 丈人 |
| | 笠田 実 | 河内 香織 |
| | 多賀 洋輝 | 長谷 和子 |

野外安全管理専門委員会

| | | |
|-----|--------|---------------|
| 委員長 | 石原 道博 | 2026.4~2028.3 |
| 委員 | 鈴木 準一郎 | 2026.4~2028.3 |
| | 粕谷 英一 | 2026.4~2028.3 |
| | 北村 俊平 | 2026.4~2028.3 |
| | 飯島 明子 | 2025.4~2027.3 |
| | 中島 啓裕 | 2025.4~2027.3 |
| | 佐藤 拓哉 | 2025.4~2027.3 |

キャリア支援専門委員会 (2024.4~2026.3)

| | | |
|--------|-----------------|------------|
| 委員長 | 鈴木 智之上野 裕介 | |
| 副委員長 | 荒木 希和子 | 高野 (竹中) 宏平 |
| 委員 | 池本 美都 | 河内 香織 |
| | 小泉 逸郎 | 曾我 昌史 |
| | 成田 あゆ | 諸澤 崇裕 |
| | 満行 知花 | 村中 智明 |
| | 本郷 峻 | 上野 裕介 |
| | Firouzeh Javadi | 佐藤 光彦 |
| オブザーバー | 可知 直毅 | 黒瀬 奈緒子 |
| | 塩尻 かおり | 半場 祐子 |
| | 三宅 恵子 | 寺田 佐恵子 |
| | 別宮 (坂田) 有紀子 | 幸福 智 |
| | 木村 恵 | 谷口 裕美 |
| | 西田 貴明 | |

情報交流支援専門委員会 (2025.4~2027.3)

| | | |
|-----|-------|--------|
| 委員長 | 深谷 肇一 | |
| 委員 | 岩田 容子 | 上野 真由美 |
| | 津田 吉晃 | 村岡 裕由 |

大会企画委員会

| | | |
|---------|--------|---------------|
| 委員長 | 北村 俊平 | |
| 副委員長 | 中川 弥智子 | |
| 運営部会 | 太田 菜央 | 池川 雄亮 |
| | 伊藤 公一 | Jamie M. Kass |
| | 森井 悠太 | 松田 一希 |
| | 西尾 治幾 | 杉山 依子 |
| | 石井 直浩 | 小黒 芳生 |
| ソポジウム部会 | 今藤 夏子 | 石塚 真太郎 |
| | 栗和田 隆 | 楊 偉 |
| | 福家 悠介 | 高屋 浩介 |
| | 古川 拓哉 | 野本 繭子 |
| | 槻木 玲美 | 大久保 祐作 |
| | 亀山 慶晃 | 武田 和也 |
| ポスター部会 | 池上 真木彦 | 清野 達之 |
| | 小林 慶子 | 山口 諒 |
| | 青柳 亮太 | 石原 凌 |
| | 西澤 啓太 | 湯本 原樹 |
| | 増本 翔太 | 松村 健太郎 |
| | 長谷川 成明 | |

ジュニアポスター部会

| | | |
|--------|--------|-------|
| | 大竹 裕里恵 | 川津 一隆 |
| | 佐藤 安弘 | 辻 冴月 |
| | 井上 智美 | 榎本 孝晃 |
| 発表編成部会 | 大崎 晴菜 | 清水 則雄 |
| | 大庭 ゆりか | 設楽 拓人 |
| | 木下 豪太 | 駒田 夏生 |
| | 瀬戸 繭美 | 辻井 悠希 |
| | 境 優 | |

日本生態学会賞・宮地賞・大島賞・奨励賞候補者選考委員会

| | |
|-------|--------|
| 工藤 洋 | 深谷 肇一 |
| 山口 幸 | 安藤 温子 |
| 大澤 剛士 | 佐々木 雄大 |

自然史研究振興賞候補者選考委員会

| | |
|-------|------|
| 渡辺 勝敏 | 千葉 聡 |
|-------|------|

生態学琵琶湖賞運営委員会

| | | |
|-----|---------------|--------------|
| 委員長 | 中野 伸一 | |
| 委員 | 大手 信人 | 中井 克樹 |
| | 徳地 直子 | 陀安 一郎 |
| | 亀田 佳代子 | 東 勝 (滋賀県副知事) |
| | 日浦 勉 (生態学会会長) | |

佐竹 暁子 (生態学会副会長)
内海 俊介 (生態学会専務理事)

大会運営改革特別委員会 (タスクフォース) (2025.4~2027.3)

委員長 吉田 丈人

委員 日浦 勉 佐竹 暁子
北島 薫 内海 俊介
半場 祐子 土居 秀幸
木村 恵 小泉 逸郎
高橋 一男 門脇 浩明
北村 俊平 山崎 裕治
中川 弥智子



京都大学 生態学研究センター

Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3
Tel : (077) 549-8200 (代表), Fax : (077) 549-8201
センター長 木庭 啓介

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page : <https://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

2026年度 センター活動予定

生態学研究センターにおける2026年度の活動予定は以下の通りです。

センターニュース、セミナーなど、センターの最新情報は、ホームページ (<https://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>) で公開しています。

なお、新型コロナウイルスの影響により本稿に掲載されている予定については変更の可能性があります。ご了承ください。

1. プロジェクト

創発的研究支援事業 (JST) (1件)、環境研究総合推進費 (1件)、科学研究費助成事業による研究 (45件)、民間財団寄附金による研究 (8件) などが進められている。

2. 協力研究員

引き続き、協力研究員 (Affiliated Scientist) を公募する。

3. 共同利用・共同研究事業 (次頁の表を参照)

2026年度の共同利用・共同研究事業 (予算措置のあるもの) として、分野間の交流や若手研究者育成の観点などから、11件の共同研究 a、4件のワークショップを採択した。ワークショップの開催日程などの詳細は、当センターのホームページに掲載する。

また、共同研究 b・資料利用は随時募集を行う。

4. 生態研セミナー

生態学研究センターの公式のイベントである「生態研セミナー」を毎月第三金曜日に開催している。本セミナーは、講演者と世話役の教員との協議によって、(1) 生態学研究センターにおけるセンター外の方々も参加可能な対面形式か、(2) Zoom を用いたオンライン講演のいずれかの形で開催する。どちらの場合も、講師の同意が得られる場合には、Zoom を用いた外部へのオンライン配信も併せて行う。オンライン配信実施の可否はそれぞれのセミナーで異なるので、詳細についてはセンターホームページでご確認ください (なおオンラインでの視聴には事前申込が必要です)。生態学研究センターにて開催の対面形式のセミナーへの参加を希望される場合、会場への道順はセンターのホームページで確認いただけます。

5. ニュースレターの発行

センターニュースは、年2回 (7月、1月) 発行する予定である。原則として冊子体の発行はせず、センターのホームページにて内容を公開し、希望者には発行のお知らせをメール配信する (次頁にメール配信登録の URL 掲載)。ただし、公的機関等へは冊子体版をお届けする。センターの活動紹介の他、研究の自由な討議の場を提供していきたい。

6. オープンキャンパス、公開授業

3月25日に、大学院入試案内のためのオープンキャンパスを開催した。

京都大学では、遠隔地教育研究施設による公開講座等を集中して実施する京大ウィークスを毎年行っている。センターはその一環として秋頃に、一般公開「学校で習わない生き物の不思議」の開催を予定している。日程などはセンターホームページに掲載し周知する。

7. 共同利用施設

大型分析機器：DNA 関係では DNA 多型解析、遺伝子転写定量解析用機器など、安定同位体関係では、炭素・窒素同位体比オンライン自動分析装置 (元素分析計)、酸素・水素同位体比オンライン自動分析装置 (熱分解型元素分析計)、GC/C (ガスクロ燃焼装置付き前処理装置)、高速液体クロマトグラフ付き前処理装置を装備した安定同位体比質量分析計 deltaV plus と、PreCon-GasBench II (自動濃縮装置付き気体導入インターフェイス)、元素分析計、GC/C を装備した安定同位体比質量分析計 delta V advantage の計2台が稼働している。

シンバイオトロン：陸域モジュール、水域モジュールが利用可能である。

琵琶湖調査船：湖沼先端研究船「はす」が稼働しており、観測調査、実習に利用される。船舶は、旧センター所在地 (下阪本) に係留されている。

実験圃場林園：センター敷地内には、実験圃場、樹種植栽林園、林木群集実験植物園、CER の森、実験池があり、種々の野外実験に利用されている。

上記施設・設備の利用希望者は、事前に以下の担当者に連絡してください。

DNA シーケンサー等関係：工藤・本庄
 安定同位体関係：木庭
 シンバイオトロン関係：山尾
 調査船関係：合田・赤塚
 実験圃場林園関係：山尾・松本・吉浪

8. 運営委員会、共同利用運営委員会

昨年度と同様、それぞれ数回開催される予定である。

● 2026年度 共同研究 a・ワークショップ 採択申請一覧 ●

| 申請者 | 所 属 | 申込内容 | 研 究 課 題 |
|----------|--|---------|--|
| 堀井 幸子 | 水産研究・教育機構 水産資源研究所 海洋環境部 暖流第4グループ | 共同研究 a | 北太平洋亜熱帯循環に供給された大気由来窒素はどこで硝酸塩プールに加わるのか？ |
| 豊田 賢治 | 広島大学・統合生命科学研究所 | 共同研究 a | ハリガネムシ類が引き起こす宿主昆虫の形態変容の比較解析 |
| 清水（稲継）理恵 | Department of Evolutionary Biology and Environmental Studies, University of Zurich | 共同研究 a | 倍数化によるエピゲノム進化と環境適応 |
| 柴田 あかり | 福井市自然史博物館 | 共同研究 a | 被子植物の性転換に関する物質の探索 |
| 竹内 望 | 千葉大学・大学院理学研究院 | 共同研究 a | 第三極・中央アジアの氷河暗色化を規定する栄養塩供給プロセスの解明 |
| 荒木 希和子 | 滋賀県立大学環境科学研究所 | 共同研究 a | 希少植物種の生活史研究とそれに基づく保全管理対策の検討 |
| 水野 健太 | 国立研究開発法人土壌研究所・流域水環境研究グループ水質チーム | 共同研究 a | 海域における下水由来窒素の動態解明に向けた $\delta^{15}N$ 安定同位体トレーサーの開発 |
| 鈴木 啓太 | 京都大学・フィールド科学教育研究センター（舞鶴水産実験所） | 共同研究 a | 舞鶴湾とその集水域の水質の季節変化～栄養塩の供給と消費～ |
| 吉田 直史 | 東北大学・生命科学研究所 | 共同研究 a | 伊吹山植物群落におけるハクサンハタザオの潜在的エコタイプ集団の特性解明 |
| 櫻木 雄太 | 京都大学・野生動物研究センター | 共同研究 a | 北極域に生息する海棲哺乳類の季節的な摂餌生態に関する研究 |
| 高野 宏平 | 長野県環境保全研究所・自然環境部 | 共同研究 a | 「匂いの形」を4次元で観る：花の立体構造とVOCs物理特性は送粉者をどう誘導するか |
| 木庭 啓介 | 京都大学 生態学研究センター | ワークショップ | 脱窒菌同位体比測定法ワークショップ 2026 |
| 木庭 啓介 | 京都大学 生態学研究センター | ワークショップ | 安定同位体生態学ワークショップ 2026 |
| 木庭 啓介 | 京都大学 生態学研究センター | ワークショップ | 安定同位体生態学測定支援ワークショップ 2026 |
| 佐藤 拓哉 | 京都大学 生態学研究センター | ワークショップ | 若手研究者のための河川観測プログラム |



| 受賞者名 | 受賞名 | 受賞研究課題・受賞講演名・受賞論文等 |
|---------------|-------------------------------------|--|
| 大竹 裕里恵 | 第27回日本陸水学会 / 吉村賞 | 湖沼堆積物で遡る、動物プランクトン集団遺伝構造から湖沼生態系までの長期変動 |
| 大竹 裕里恵 | 第14回日本生態学会奨励賞 / 鈴木賞 | 動物プランクトンと挑む生態学：レトロスペクティブとモニタリングの統合を目指して |
| 高林 純示 | アジア・パシフィック化学生態学者協会 / 生涯業績賞 | この賞は、アジア・パシフィック地域における化学生態学の発展や普及に多大な貢献をした研究者に贈られるものです。植物の葉のかおりが媒介する植物-節足動物間および植物-植物間コミュニケーションに関する生態学的研究とその農生態系への応用 |
| 土居 健央 山尾 僚 | 第73回日本生態学会ポスター賞 / 群落・遷移・更新) 優秀賞 | 形質は種間のニッチの違いを説明するか：草本競争実験によるアプローチ |
| 本吉 亮介 山尾 僚 | 第73回日本生態学会ポスター賞 / 植物個体群・生活史・繁殖) 優秀賞 | 動物付着散布型植物は背丈が低いのか：キク科の種子散布様式と植物高の相関進化の検証 |
| 藤田 翔 | 第41回個体群生態学会 / 優秀ポスター賞 | 河川の空間構造は温暖化でのサケ科魚類の生活史多様性を維持する |
| 井上 輝紀 | 第6回研究交流会 / 理学研究科銀楓賞 | 種子散布者の糞がもたらす芽生えの好適な微生物環境 |

センターニュース メール配信登録のお願い

センターニュース発行のメール配信登録、配信先の変更、配信停止等をご希望の場合は、インターネット上の以下のフォームより必要事項のご入力をお願いいたします。

<https://ws.formzu.net/fgen/S75832635/>

センターニュースはバックナンバーを含め、センターホームページの以下の URL からご覧いただけます。

<https://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/newsletter.html#ct3>

